

更新世末期のアムール川下流域における 環境変動と人類行動 Vol. 3

ゴンチャルカ 1 遺跡 (2001 年) 発掘調査報告書

2018

橋詰 潤, シェフコムード I. Ya.,
内田和典, 長沼正樹 編
明治大学黒耀石研究センター
資料・報告集 4

Paleoenvironmental changes and Human behavior during the terminal Pleistocene
in the lower Amur River Basin, Vol. 3:

Excavations at the Goncharka 1 site (2001)

2018

Edited by Jun Hashizume, Shevkomud Igor. Ya.,
Kazunori Uchida, Masaki Naganuma
Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University
Materials and Reports 4

序

明治大学黒耀石研究センターは、「人類-資源環境系」を重点研究領域とした学術研究機関です。人類と資源環境をめぐる問題は初期人類から今日まで通底する課題であり、現代の資源環境問題にも重要な視点を提供しうるものです。また、今日ではこうした人類と資源環境系に関わる研究には、学際的・国際的な多視点的取り組みも求められてきています。明治大学黒耀石研究センターでは、これまで地質環境やその中の石材環境、植物環境、動物環境など、人類-資源環境系における多様なテーマに関連する研究、および諸環境に対する人類の適応や働きかけに関する研究への多視点的なアプローチを行っており、それらの成果を公開するために紀要『資源環境と人類』を刊行してきました。

また研究の進展の原動力には具体的な遺跡の発掘調査も重要な意味をもつことは言うまでもありません。『明治大学黒耀石研究センター資料・報告集』では、人類-資源環境系ダイナミズムの多視点的・かつ具体的な研究成果を広く公開するために刊行するものです。

今回報告するノヴォトロイツコエ遺跡群の調査は、本センターの橋詰潤専任准教授が中心となって進めている研究であり、ロシア連邦ハバロフスク市中心部から南西約 15 km の露中国境付近に位置します。本遺跡群とその周辺には、合わせて 60 箇所近くの更新世末期から完新世初頭の遺跡が確認されており、アムール川下流域における最古の土器を伴い、更新世/完新世移行期の考古文化であるオシポフカ文化期遺跡の密集地域として注目を集めてきました。オシポフカ文化は更新世末期の土器、石斧や大形尖頭器を含む両面加工石器などの共通要素から、日本列島の縄文草創期の比較対象として注目されています。この時期は更新世から完新世へと移行する中で、急激な寒暖の振幅を繰り返しながら、安定した温暖期へと向かった環境の激変期でもあります。特に日本列島における縄文文化の成立を考えるための比較対象として最も適しており、黒耀石研究センターが目指す「人類-資源環境系ダイナミズムの多視点的な研究」に資する研究テーマでもあります。

明治大学黒耀石研究センターでは、2010 年より N. I. グロヂェコバ名称ハバロフスク地方郷土誌博物館と学術共同研究協定を締結し共同で当地での発掘調査を行うとともに、先行調査の出土資料の分析を継続してきました。調査自体は現在も継続中ですが、今回はゴンチャルカ 1 遺跡の 2001 年調査の成果をまとめました。この成果が広く注目され、更なる研究の深化と国際化に貢献することを祈念するものです。

なお、本調査の実施にあたり、ハバロフスク地方郷土誌博物館をはじめとするロシア側の共同研究者および研究協力者の皆さま、国内の関係諸機関・諸氏には調査に対する格別のご配慮、ご指導、ご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

2018 年 3 月

明治大学黒耀石研究センター長

阿部 芳郎

例 言

- ・本書は、ロシア連邦ハバロフスク地方ハバロフスク市ノヴォトロイツコエ村に所在する 2001 年度ゴンチャルカ 1 遺跡の調査成果報告書である。
- ・2001 年度発掘調査は、N.I. グロヂェコバ名称ハバロフスク地方郷土誌博物館とプロジェクトアムールチーム（代表：加藤博文・山田昌久）の間で締結した国際学術交流協定書に基づいて組織、運営された。
- ・調査は次の助成を得て実施した。2001 年度ゴンチャルカ 1 遺跡の発掘調査は、長沼正樹（東京都立大学大学院：当時）の平成 13 年度（財）高梨学術奨励基金、資料調査は、橋詰潤（明治大学黒耀石研究センター）による平成 28～30 年度 JSPS 科研費若手研究（B）16K16944 の助成による成果である。
- ・本書の編集は、橋詰潤、シェフコムード, I., 内田和典, 長沼正樹が担当した。英文作成は橋詰が行い、露語固有名詞は内田が統一した。露語については、引用文献の日本語訳標記に統一がないが、原則的に各原典に即して記載した。また初出の露語については日本語の後に露語を表記した。
- ・本書の執筆は、末尾に氏名を記した者が行った。
- ・各年度における調査参加者は次のとおりである。所属は調査時のもの。

2001 年度発掘調査：2001 年 8 月 13 日から 8 月 30 日まで

日本側：長沼正樹，松本拓（早稲田大学大学院），工藤雄一郎（東京都立大学大学院），橋詰潤（早稲田大学），五味岳（東京都立大学），ロシア側：シェフコムード, I., コシツウナ, S., ゴルシコフ, M.（以上，ハバロフスク地方郷土誌博物館考古学部局），アレクセンコ, A., パーノヴァ, A., サフチェンコ, S.（以上，同博物館職員），ラトウイポフ, I., サローコバ, D.（以上，ハバロフスク教育大学学生），コスツウナ, U., コスツウナ, K., アレクセンコ, V., パーノフ, V., ラドチェニコワ, A.（以上，博物館職員の家族で調査作業員），アニサビェーツ, D.（運転手）。

2001 年度整理作業：2001 年 8 月 31 日から 9 月 3 日までハバロフスク地方郷土誌博物館で実施。

日本側：長沼，松本，工藤，橋詰，五味，ロシア側：シェフコムード

2017 年度整理作業：2017 年 11 月 19 日から 11 月 26 日までハバロフスク地方郷土誌博物館で実施。

日本側：橋詰潤（明治大学黒耀石研究センター），長沼正樹（北海道大学アイヌ・先住民研究センター），内田和典（北海道教育庁），ロシア側：ゴルシコフ, M. V.

- ・本発掘調査の内容については、以下の文献で概要報告や紹介を行っているが、本報告の内容が優先する。

長沼正樹 2002 「アムール下流域ゴンチャルカ遺跡群の発掘調査」『高梨学術奨励基金年報（平成 13 年度）』：51-63.

長沼正樹・И. Я. Шэфкамурт 2002 「ゴンチャルカ 1 遺跡における移行期の石器群」『第 3 回北アジア調査研究報告会』：pp.31-32, 札幌, 北アジア調査研究報告会準備委員会・古代学協会北海道支部後援

長沼正樹・I.Ya. Шэфкомурт・工藤雄一郎・S.F. コスチナ・松本拓・M.V. ガルシコフ・橋詰潤 2003 「ゴンチャルカ 1 遺跡 2001 年発掘調査の概要とその諸問題」『旧石器考古学』64：73-82.

Шевкомуд И. Я., Наганума М., Горшков М. В., Косицына С. Ф. Новые исследования стоянки Гончарка -1 (Приамурье) в 2001 г. Записки Гродековского музея 3: 21-30.

- ・本研究を実施するにあたり、以下の諸氏からご指導、ご協力をいただいた。

阿部芳郎教授，大下明氏，大貫静夫教授，小野昭教授，小畑弘己教授，加藤博文教授，コターさおり博士，佐藤雅一氏，中村由克博士，長沼孝氏，橋詰久美氏，福田正宏博士，山田昌久教授，山原敏朗博士，Y.V. クズミン，V.I. ジャーコフ，N.I. ルーバン。

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
1. 調査の目的と背景	1
1-1 調査の目的	2
1-2 調査の経緯	3
2. ゴンチャルカ 1 遺跡の位置と環境	5
2-1 遺跡の位置と周辺の環境	6
2-2 先行研究	9
3. ゴンチャルカ 1 遺跡 2001 年発掘調査の成果	13
3-1 ゴンチャルカ 1 遺跡における発掘調査	14
3-2 調査区の設定と調査の方法	14
3-3 調査の経緯	15
3-4 層位, 遺構, 遺物の出土状況	16
3-5 出土遺物	24
3-5-1 石器	29
3-5-2 土器・土製品	53
4. 成果と課題	81
4-1 成果	82
4-2 課題	86
引用文献	87
5. 考察	89
5-1 ゴンチャルカ 1 遺跡におけるオンポフカ文化の検討	90
5-2 2001 年ゴンチャルカ 1 遺跡出土試料の放射性炭素年代測定	98
English summary	102
写真図版 (PL.1 ~ 22)	

1. 調査の目的と背景

1. 調査の目的と背景

1-1 調査の目的

更新世から完新世への移行期は、急激な寒暖の振幅を繰り返しながら、安定した温暖期へと向かった環境の激変期である。本報告の編者らは、人類がこうした環境の変動へいかに適応したのかを解明することを最終的な到達目標として研究を進めている。その中で今回報告を行うアムール川下流域での調査では、当該期の環境変動と人類行動の変化との対応関係を検討できるデータを発掘調査によって獲得することを目的とした。

2001年、編者らのうちシェフコムード（Шевкомуд）И. Я. と長沼は、ロシア連邦ハバロフスク地方のゴンチャルカ（Гончарка）1遺跡を対象として、日露共同調査を実施した。遺跡は、更新世から完新世への移行期の年代に相当する初期新石器のオシポフカ（осиповская）文化の遺跡が密集する「ヘハツィル・ジオークオロジー地区」内に所在する。近隣には、編者らが既報告したノヴォトロイツコエ（Новотроицкое）10遺跡（橋詰他 2017）やオシノヴァヤレーチカ（Осиновая Речка）10遺跡（橋詰他 2016）などが立地する。本遺跡は、編者のシェフコムードが1995年に100 m²、1996年300 m²の調査を実施し、この内1995年の調査成果は日本語でも紹介された（シェフカムート、梶原訳・解説 1997）。この時に紹介された炭化物による放射性炭素年代測定値は、9890 ± 230B.P. (Gak18981)、10590 ± 60B.P. (LLNL102168)、12500 ± 60B.P. (LLNL102169) であり、極東の更新世／完新世移行期と土器の出現を考える上で重要な遺跡の一つであることが、日本国内でも「最古の土器群」に関連して注目されてきた（梶原 1998、栗島 1999 など）。そこで当地域の遺跡の基礎データを蓄積した上で、他地域と相互に比較する必要があると判断し、新しい遺跡の発掘調査を企画した。本遺跡の2001年の発掘調査に関する既出の概要報告は、長沼 2002、長沼・シェフカムート 2002、長沼・シェフカムート他 2003 である。

（橋詰・長沼・内田）

1-2 調査の経緯

1997年に筑波大学大学院の加藤博文研究員（文部技官：当時）が、北東アジア新石器文化の時間的・空間的な多様性の解明を目的として、グロヂェコバ名称ハバロフスク地方郷土誌博物館のシェフコムード研究員と日露共同調査を企画し、博物館収蔵資料の調査と考古遺跡の分布調査（踏査）を実施した（加藤 1998、加藤・石井 1998）。同博物館はその前より、1992年の北海道開拓記念館の山田悟郎学芸員と右代啓視学芸員、1996年から実施された奈良文化財研究所の臼杵勲主任研究官と東京大学大学院生の熊木俊朗氏（いずれも当時）など、日本人研究者と共同で野外調査を実施していた（右代 1993、臼杵・スピジェボイ 1997、臼杵ほか 1999）。1998年から東京都立大学（当時）の山田昌久助教授を迎えて「プロジェクト・アムール」を組織し、新石器時代遺跡の発掘調査と先住民族の民族誌調査を並行して進める可能性を探った（Kato et al. eds.1999）。発掘調査は1998年度のカリチョーム（Кольчём）3遺跡（Шевкомуд и Като 1999、Шевкомуд 2004）、1999年度のゴールィムィス（Гольий Мыс）遺跡群（Шевкомуд и Като 2002、加藤ほか 2003、福田ほか 2005）、2000年度のマリ（Мари）5遺跡と、完新世に相当する中期～後期新石器時代の集落遺跡を対象として実施した。2000年代の後半からは首都大学東京の山田昌久教授や大学院生の内田和典（当時）、早稲田大学大学院生の松本拓（当時）、東京大学（当時）の福田正宏博士や熊木俊朗准教授、大貫静夫教授、佐藤宏之教授らによっても新石器時代の各時期や初期鉄器時代への移行期について

日露共同研究が進められた。

一方で、更新世から完新世への移行期に関する当該地域では、1990年代にオシポフカ文化に帰属するガーシャ（Гася）遺跡とフーミ（Хумми）遺跡の成果で、オシポフカ文化が放射性炭素年代測定によって更新世から完新世への移行期に相当すること、土器を伴うこと、石器群の中に研磨技術（局部磨製石斧など）が存在することが確認され、従来は中石器時代と認識されていたオシポフカ文化の位置づけが初期新石器時代へ変更された。この新しい研究成果が日本語で紹介されると（オクラードニコフ・メドヴェージェフ 1990、デレヴァンコ・メドヴェージェフ 1995、シェフカムート 1997、梶原 1998、栗島 1999 など）、アムール川下流域の初期新石器への関心が、日本国内でも改めて高まった。当時のロシアと日本双方の研究動向を受けて共通の課題意識が芽生えたことで、将来的に日本列島の縄文草創期との比較を念頭に置き、完新世の遺跡だけでなくオシポフカ文化を対象とした発掘調査も実施する企画が検討された。協議の結果、シェフコムードが日本隊とは別に 1995 年と 1996 年に発掘調査を実施していたゴンチャルカ 1 遺跡を対象に、調査区を拡張する形で 2001 年に日露共同調査を実施した（長沼ほか 2003）。

発掘調査は 2001 年 8 月 13 日～8 月 31 日まで、日本側は長沼、松本拓、工藤雄一郎、橋詰潤が中心となり、ロシア側はシェフコムード、ガルシュコフ、コスチナらが中心となって実施した。出土品の整理作業と分析は、橋詰・内田・長沼が 2018 年 2 月まで断続的に実施した。（長沼・内田）

2. ゴンチャルカ 1 遺跡の位置と環境

2. ゴンチャルカ1遺跡の位置と環境

2-1 遺跡の位置と周辺の環境

2-1-1 遺跡の位置

オシポフカ文化は、中露国境を越えて広域的に分布する。特にアムール川流域のスレドネアムールスカヤ低地帯には、オシポフカ文化期の遺跡が三地域に集中している (Fig.2-1)。一地域目は、ハバロフスク市中心部から北東約 40km に位置するマリシエヴォ (Малышево) 村からシカチ・アリヤン (Сакачи - Алян) 村周辺で、数度の発掘調査が実施されたガーシャ (Гася) 遺跡や岩画で著名なシカチ・アリヤン遺跡の下層などである。二地域目は、オシポフカ文化の標識遺跡となったオシポフカ (Осиповка) 1 遺跡などを含むハバロフスク市内のヴォロネジュスコエ (Волонезское) 岬付近。そして、三地域目は、ノヴォトロイツコエ 10 遺跡等が位置する地域は、ヘハツィル・ゲオアルヘオロギー地区 (Хехцирский геoarхеологический район) が設定され、古地形や花粉分析からの古環境復元や、14C 年代測定を伴う調査が開始

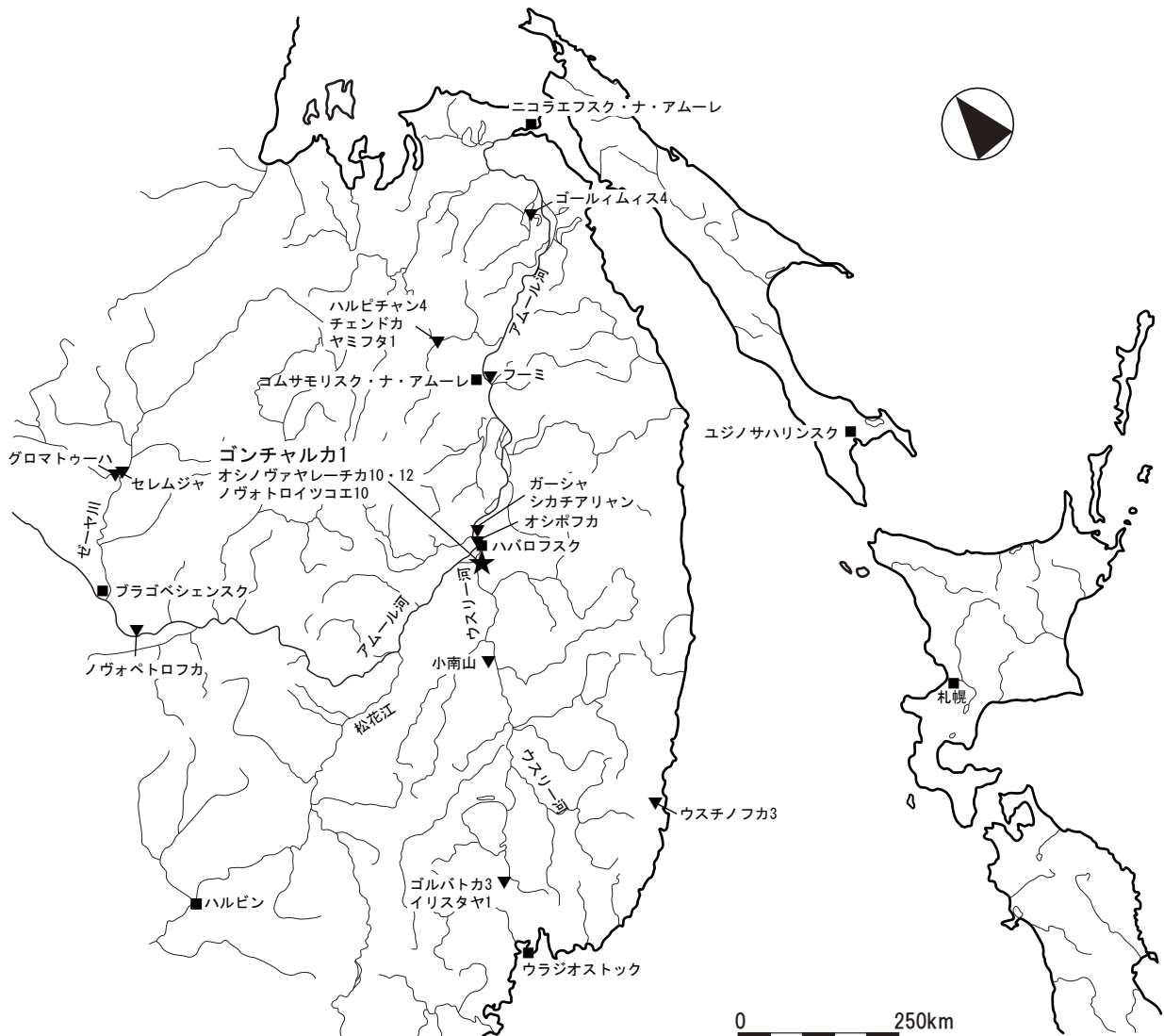


Fig.2-1 極東地域の更新世終末期から完新世初頭の主な遺跡位置図

Fig.2-1 Location of major sites from terminal Pleistocene to initial Holocene in Far East

されている (Шевкомуд 他 2001)。へハツイル山脈は、標高 950m の大へハツイル山と標高 413m の小へハツイル山から成り、小河川が網状に発達して流路を形成している。植物相・動物相において多様な生態環境が育まれていることから、ポリショイへハツイル自然保護区域として指定されている。

このへハツイル・ゲオアルへオロギー地区には、オシポフカ文化の遺跡が集中しており、所在地の地名をもとに西から、ビチーハ遺跡群、ノヴォトロイツコエ遺跡群、オシノヴァヤレーチカ遺跡群に

区分されて、東西約 10km に渡り、オシポフカ文化の遺跡が約 60 箇所確認されている (Fig.2-2)。これらの遺跡群で近年に発掘調査が行われ、調査内容の一部が公表されているオシポフカ文化の遺跡は、ゴンチャルカ 1 遺跡 (長沼他 2003, Шевкомуд, Яншина 2012), ゴンチャルカ 3 遺跡 (Малявин, Шевкомуд 1999), アムール 2 遺跡 (Шевкомуд 他 1999), ノヴォトロイツコエ 3 遺跡 (Шевкомуд 他 2004), オシノヴァヤレーチカ 10・12 遺跡 ((Шевкомуд 2001, 加藤・赤井 2003, 橋詰編 2016), オシノヴァヤレーチカ 16 遺跡 (Шевкомуд 2004) がある。いずれもアムール河の支流に面し、現アムール川面からの比高が 15 ~ 45m の崖上の平坦地に立地する。

今回報告するゴンチャルカ 1 遺跡は、ハバロフスク市ノヴォトロイツコエ村から北東に 1.2km ほど離れた地点に所在する (Fig.2-3)。本遺跡は、北西にアムール支流を望み、北東から南西に向けて傾斜する。

(内田・長沼)

2-1-2 周辺の環境

ゴンチャルカ 1 遺跡を取り巻く環境について以下、近年の周辺科学の成果を参考にしながら概観していくことにしたい。

アムール川は、全長 4444km, 流

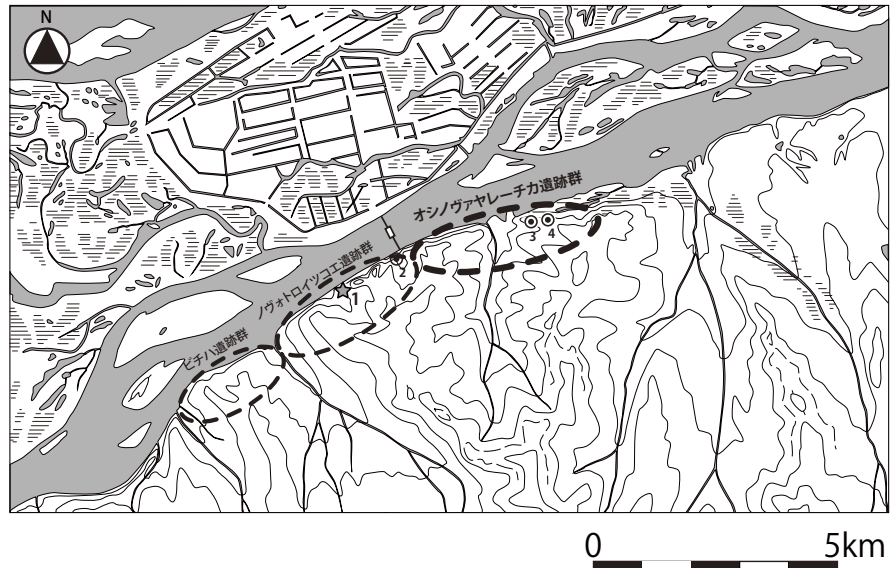


Fig.2-2 ノヴォトロイツコエ遺跡群の位置図

(1: ゴンチャルカ 1 遺跡, 2: ノボトロイツコエ 10 遺跡, 3: オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡, 4: オシノヴァヤレーチカ 12 遺跡)

Fig.2-2 Location on Novotroitsukoe site group

(1: Goncharka-1, 2: Novotroitsukoe-10, 3: Oshinovaya rechika-10, 4: Oshinovaya rechika-12)



Fig.2-3 ゴンチャルカ 1 遺跡の位置図

Fig.2-3 Location on Goncharka 1 site

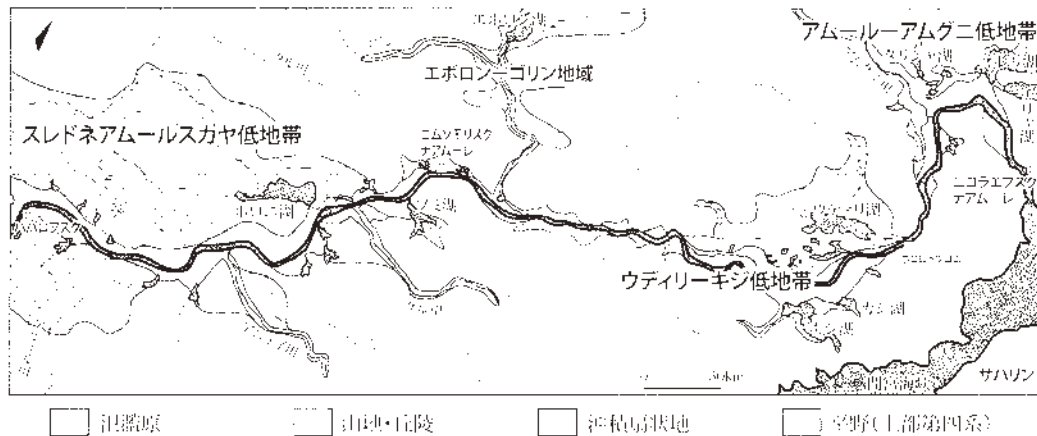


Fig.2-4 アムール下流域の地形区分 (福田 2014 より)

Fig.2-4 Geographical features in lower Amur basin (Fukuda 2014)

域面積 205 万 km² となり、世界でも有数の大河である。アムール川下流域のハバロフスク周辺には現在 13 万 km² もの広大な湿原地帯が広がっている。湿原地帯が広がるアムール川下流域の平坦な低地帯は、完新世以降に形成されたスレドネアムールスカヤ (Среднеамурская) 低地帯、ウディリーキジ (Удиль - Кизинская) 低地帯、アムール-アムグニ (Амуро - Амугуньская) 低地帯の三つの平野部に区分されており、7000 ~ 5000BP に現景観の地形形成が進んだものと考えられている (Fig.2-4) (Махинов 2006, 福田 2014)。

北東アジア地域における地勢状況は、平坦な内陸域と山岳地形が卓越する沿岸域に大別される (沖津 2002)。平坦な低地帯は、シベリア東部のヤクーツク市やハバロフスク市を中心とするアムール川流域に主に分布しており、サハリン北部やカムチャツカ半島の海岸沿いにわずかに分布するにすぎない。沿岸地域には、シホテーアリニ山脈やジュクジュル山脈、コリマ丘陵などの標高 2000 ~ 2300m 程度の比較的なだらかな山体や丘陵地形が発達する特徴がある。内陸域と沿岸域の地勢状況の違いは気候環境にも大きく影響している、前者では夏の気温が高く、冬の気温がきわめて低い。後者では、夏の気温は内陸域と変わらないが、冬はやや温暖となる。オシノヴァヤレーチカ遺跡群が位置するハバロフスク市周辺の気候環境は、年平均気温 1.5 度、最暖月の平均気温 21.3 度、最寒月の平均気温 - 22.0 度、年間降水量 558mm となる。また、暖かの指数は 50.4 度・月で、冷温帯落葉広葉樹林あるいは冷温帯針広混交林が成立可能な生育期間の積算温度を満たしている。

高原 (2011) によるハバロフスク周辺アムール川流域の植生変遷は、最終氷期最盛期にはグイマツが散在し、カンバ類やハンノキ類などの低木、イネ科などの草本などからなる疎林状の植生が発達し、晩氷期にはグイマツがやや減少した。約 9000 年前には、ハルニレやヤチダモなどの落葉広葉樹が増加し、8000 年前以降には、モンゴリナラが優勢となり、これにハルニレ、シナノキ類、オニグルミ類、ヤチダモ、カンバ類などをともなう落葉広葉樹林が形成された。また、約 2000 ~ 3000 年前から、チョウセンゴヨウの増加が認められ、エゾマツもやや増加する。

現在みられる針広混交林が形成されたのは、約 2000 年前以降となり、ハバロフスク市周辺の現生の森林植生は、針葉樹 88.7%、落葉広葉樹 9.3%、低木 2.0% となる (沖津 2002)。Bazarova (2008) では、完新世において 8900-8300BP、5700-5000BP、4000-3200BP が温暖期であったことが指摘されており、特に、5700-5000BP はアムール下流域全体に多様な種からなる森林構成が拡大し、アムール河口域まで針広混交林が成立した。一方寒冷期は、8200-8000BP、4500-4000BP、2500BP とされている。

現在、沿海地方からハバロフスク地方南部にかけては針広混交林が発達しているが、ハバロフスク地方中央部以北はグイマツ林に移行し、針広混交林を形成する主要な落葉広葉樹の一部は、アムール河口域まで分布する（竹原 2005）。植物相のほかに動物相についても大きな境界が存在し、極東アジアで一般的なシカやイノシシが希薄であり、森林の特徴と重なるように、北方系の動物であるトナカイやヘラジカなどが分布する。

白岩（2011）によれば、ロシア極東地域における森林面積自体は 1966 年以降、約 2500 万 ha でほぼ安定しているが、高い樹齢の森林が減少していることが指摘されている。その背景として、森林火災と森林開発が大きな要因となる。特に、森林火災については、ロシア極東地域では年間平均 20 万 ha もの森林火災が起きている。小雨高温などの気象的な悪条件や夏期の乾燥条件に人為的な要因が重なる場合に発生している（白岩 2011）。ロシア極東地域の発掘調査時にはこの森林火災の影響に注意を払う必要がある。

次に、ハバロフスク周辺のアムール川右岸沿いの岩体は、泥質基質に玄武岩やチャートを含むオリストストロームや砂岩泥岩互層が断層で繰り返して分布しており、玄武岩中に挟まれて石灰岩も見られる（永広 2003）。これらはハバロフスクコンプレックスと呼ばれ、南方のサマルカ帯ジュラ紀付加体の北方延長と考えられており、日本海拡大中～拡大後に、現在のハバロフスク地方から沿海地方にかけての大陸縁が日本海拡大前は現日本列島と一体であり、北海道から東北地方日本海側において新第三紀中新世前期（24Ma～17Ma）に起こった海底火山活動（グリーンタフ活動）に伴い、沿海地方北部などに各種の火山岩類が形成された（Shimazu・Kawano 1999, 石渡・辻森 2001, 永広 2003）。

（内田）

2-2 先行研究

オシポフカ文化研究は、1926～1927年にゲラシモフ（Герасимов）М. М. が、木葉形尖頭器やスクレイパー、ナイフなどを含む石器群をハバロフスク市近郊の遺跡で発見したことを嚆矢とする（Деревянко 1983）。その後、オクラドニコフ（Окладников）А. П. は、1935年にアムール下流域において総合学術調査を実施する中で、ハバロフスク市内のアムール河に架かる鉄橋付近（鉄橋遺跡）の調査や、1960年代にはオシポフカ遺跡などの考古学調査を実施し、ゲラシモフが発見した資料を層位的に確認した（Окладников 1980）。オクラドニコフとデレビャンコ（Деревянко）А. П. は、アムール下流域や極東周辺地域の研究調査の成果を加え、オシポフカ文化に土器や磨製石器が伴わないことを根拠に「中石器時代」に位置づけた（Окладников и Деревянко 1973）。

しかし、1975・76年、1980年、1986～1990年のガーシャ（Гася）遺跡（Деревянко и Медведев 1992; 1993; 1994）の発掘調査で、オシポフカ文化の石器に土器が伴うことが確認されたことにより、当文化の位置づけが「初期新石器時代」へ変更されることとなった。さらに、本遺跡から採集された炭化物試料によって、調査区 I 下層の粘土層中から 12960 ± 120 14C yr BP (JE -1781)、調査区 IV の地山直上の砂質粘土層中から 10875 ± 90 14C yr BP (AA-13393) と 11340 ± 60 14C yr BP (GEO-1413) の年代測定値が得られた。加えて、フーミ（Хумми）遺跡（Лапшина 1999）やゴンチャルカ 1 遺跡（Шефкамурт 1997, Шевком уд и Яншина 2012）の発掘調査でも、オシポフカ文化の石器に土器が伴うことが改めて確認され、14C 年代値も下層で 13260 ± 100 14C yr BP (AA-13392)、上層で 10375 ± 110 14C yr BP (AA-13391) という、ガーシャ遺跡での例を迫認する年代測定値が得られた。

ガーシャ遺跡とフーミ遺跡での研究成果により、①オシポフカ文化に 14C 年代測定値が与えられ、本文化が更新世 - 完新世の移行期に位置すること、②当文化の石器群には土器が伴うこと、③石器群の中に研

Table.2-1 アムール下流域の土器出現期の ¹⁴C 年代測定値 (2017 年 3 月現在)

Table.2-1 Radiocarbon dates of emergence pottery in Lower Amur (in March 2017)

Site	Material	Lab.No.	14C (B.P.)	Reference
Goly' Mus-4	炭化物	AA-36277	12925±65	Кузьмин и др. 2000
Goly' Mus-4	炭化物	AA-36278	12680±65	Кузьмин и др. 2000
Goly' Mus-4	炭化物	AA-36279	12610±60	Кузьмин и др. 2000
Goly' Mus-4	炭化物	AA-36281	12360±60	Кузьмин и др. 2000
Gasha	炭化物	JE-1781	12960±120	Окладников и др. 1983
Gasha	炭化物	GEO-1413	11340±60	Keally et al. 2004
Gasha	炭化物	AA-13393	10875±90	Keally et al. 2004
Khumi	炭化物	AA-13392	13260±100	Лапгина, 1999
Khumi	炭化物	AA-13391	10375±110	Лапгина, 1999
Khumi	炭化物	AA-23130	10540±70	Лапгина, 2002
Khumi	炭化物	COAH-3826	12150±110	Лапгина, 2002
Goncharka-1	炭化物	LLNL-102169	12500±60	Shevkomud, 1997
Goncharka-1	炭化物	AA-25437	12055±75	Джали и др. 1999
Goncharka-1	土器附着炭化物 (外面、口縁部)	Tka-15004	11390±60	Kunikita et al 2013
Goncharka-1	炭化物	Tka-13005	11340±110	Yoshida, 2004
Goncharka-1	土器附着炭化物 (内面、底部)	Tka-15003	11110±60	Kunikita et al 2013
Goncharka-1	炭化物	LLNL-102168	10590±60	Shevkomud, 1997
Goncharka-1	炭化物	Tka-13007	10550±80	Yoshida, 2004
Goncharka-1	炭化物	AA-25438	10280±70	Джали и др. 1999
Goncharka-1	炭化物	AA-25439	10280±70	Джали и др. 1999
Goncharka-1	炭化物	GaK-18981	9890±230	Shevkomud, 1997
Osinovaya Rechka-16	炭化物	AA-60758	11365±60	Данная работа
Osinovaya Rechka-16	炭化物	Tka-12951	11140±110	Yoshida, 2004
Osinovaya Rechka-10	炭化物	Tka-12954	10760±150	Yoshida, 2004
Osinovaya Rechka-10	樹皮 (木炭)	MTC-17575	11150±60	橋詰ほか編2015
Osinovaya Rechka-10	樹皮 (木炭)	MTC-17576	10930±60	橋詰ほか編2015
Osinovaya Rechka-10	樹皮	MTC-17577	11110±60	橋詰ほか編2015
Osinovaya Rechka-10	樹皮	MTC-17578	11130±60	橋詰ほか編2015
Osinovaya Rechka-10	樹皮	MTC-17579	11150±60	橋詰ほか編2015
Novotroitsukoe-10	土器附着炭化物 (内面)	Tka-15005	11250±80	Kunikita et al 2013
Novotroitsukoe-10	土器附着炭化物 (内面)	Tka-15006	11620±70	Kunikita et al 2013

磨技術 (局部磨製石斧など) が存在すること, などが確認されたことによって中石器時代から初期新石器時代へと位置づけが変更された (Медведев 1995 など)。

オシポフカ文化の石器組成の一般的なあり方は, 細石刃核と多様な両面調整石器を主体とし, 搔器や削器, 石斧などが伴う。細石刃核は, 湧別技法と, 小形の円礫を素材に簡素な打面形成で細石刃を剥離するものとの二種類がセットとなる。

両面調整石器は, 尖頭器, 石斧, 石鎌など多様な形態があり, 局部磨製をもつものも含まれる。また「手斧=スクレブラ状石器」と呼称される両面調整石器がある。オシポフカ文化を特徴づける石器の一種であるが, 器種認定に至るプロセスが感覚的なものであり, 指示する内容が各種の未製品や石核, 搔器, 石斧などが含まれている (長沼 2004)。他にも石錘の可能性のある溝をもつ円礫や, 軟玉製管玉や双頭男根状石製品などもオシポフカ文化に帰属すると考えられている。しかし, 管玉や男根状石製品などの象徴的遺物については, 遺跡内での共伴に問題が残される (小畑 2003・2004, 長沼 2004)。当該地域は土層堆積が薄く, 後世の土地利用による攪乱が大きいため, 本来的にはオシポフカ文化とは異なる時期のものが含まれている可能性がある。これは象徴的遺物だけの問題ではなく, 一遺跡内における人工遺物の組成や共伴性にも及ぶ問題であり, 当該地域で研究を進める上での重要な課題の一つである。

また当文化で利用される主な石材は, 珪質頁岩や流紋岩などで構成されており, ごく稀に黒耀石の小破片が確認されることがある。

オシポフカ文化の土器には, 条痕文や絡条体圧痕文, 円孔文, 櫛目ジグザグ文などがある。これらの土器はパッチワークによって成形されているものとされる (栗島 1999)。しかし, 当文化の土器は, 小破片で出土することが多く, 保存状態がきわめて悪いため, 器形や文様, 成形技法を解読することが難

しい。当文化の石器研究と比較して、土器研究が進展しない原因の一つである。こうした状況下にあるオシポフカ文化の土器研究であるが、梶原洋は、極東・東シベリアの「最古の土器群」を広域的に検討し、出現期の土器を7つの型式に設定して編年案を提示した（シェフカムート 1997 の梶原解説、梶原 1998）。この「最古の土器群」は、それぞれ表面の文様に違いがあるものの、内面の調整には、すべて絡条体を横に引いたかと思わせる条痕文をもつという特徴が共通する。

土器利用については、主に食物調理とあく抜き説を有力な仮説としている日本列島の出現期土器の理解に対し、アムール下流域を含めた極東・東シベリアでは、調理具としての土器に加え、接着剤としてのニカワや、油製造など、多目的に用いられた可能性が指摘されている（梶原 1998）。

アムール下流域においてオシポフカ文化以前の状況は明確ではない。現在のところ後期旧石器段階の遺跡はゴールィムイス（Гольй мьис）4 遺跡のみである。当遺跡は、大形の石刃製石器と石刃石核が出土しており、両面調整石器や細石刃核、土器が伴わないことから、オシポフカ文化よりも古い上部旧石器として評価された（Шевкомуд他 2002）。Table.2-1 は 2018 年 3 月までに得られたオシポフカ文化に関連する 14C 年代値の一覧である。当遺跡で得られた年代値は、オシポフカ文化の数値年代とほぼ重複することがわかる。現時点では比較できる類例がないため、オシポフカ文化の変異幅や年代的に併行する異系統石器群などとしての可能性（長沼 2004）や、後期旧石器と初期新石器の一部共存の可能性（Kuzmin 他 2003、加藤 2006）などがあり、今後の調査に委ねられる課題の一つである。

このようにオシポフカ文化の石器群や土器群から提示される多様性とその存続期間や編年的細分の問題は、数値年代においても同様である。Table.2-1 を参照するとオシポフカ文化は、おおよそ 13000BP ～ 10000BP にまで及んだ長期間の文化をまとめたものである。シェフカムードは、1995・1996 年調査のゴンチャルカ 1 遺跡において資料群が層位的な差異をもって出土していることと、それぞれの層位から得られた年代値が 12000BP と 10000BP の二つのピークをもつことなどを考慮して、オシポフカ文化を前期と後期とに二時期区分することを提示している（Шевкомуд, 1998、Kuzmin 他 2003）。

しかし、当該地域は、堆積層が薄いことや後世の土地利用による攪乱が大きく影響することから、石器群と土器の共伴関係や年代決定の手続きなど、資料間の相関性を読み取る上で課題とすべき問題が数多く残される。また資料提示の方法にも報告者のバイアスが多分にかかる場合があり、遺跡の詳細な情報開示も求められる。現状では、考古遺物の確実な位置情報や、年代値の蓄積、遺跡形成過程を踏まえた遺跡そのものの評価を小規模調査であったとしても確実に実施する必要がある。

当該期の人類の居住形態などの適応行動の変化を理解するためには、遺跡の形成過程を議論の前提として、各遺跡における遺構や人工遺物の個別的な検討を行う必要がある。そして、これらの相関性や遺跡周囲の生態環境との比較検討を行うことで、当該期の人類活動への検討の準備が可能となる。そのためには、遺跡から得られる基礎的な情報をできる限り回収し、一遺跡内での多角的な考古資料の分析を進めることを主眼とした調査を実践する必要がある。編者らは当該地域におけるオシポフカ文化の解明を目指して以上の問題点を念頭に置きながら継続的な調査を実施している。（内田）

3. 2001 年発掘調査の成果

3. 2001年発掘調査の成果

3-1 ゴンチャルカ1遺跡における発掘調査

ゴンチャルカ1遺跡は、ロシア連邦ハバロフスク市の中心街と、中露国境との中間地点であるノヴォトロイツコエ村に所在する。本遺跡は、ウスリー川とアムール川分流の合流地点付近の分流に面し、へハツィル山脈からの扇状地の末端が、アムール分流の浸食作用によって形成された崖線付近に位置する。現アムール川水面との比高10～25mの、枯れ沢（ゴンチャルカ川）に面する台地の突端に立地する。

2001年度調査は、シェフコムードが1995・1996年において発掘調査を実施した調査区Ⅰ～Ⅲ区に隣接してⅣ～Ⅵ区を設定した。（長沼）

3-2 調査区の設定と調査の方法

グリッド法による調査区の設定は、1995・1996年の調査との整合性を重視し、これを引き継いだ。10×10mの大グリッドをセクターと称し、遺跡はⅠからⅥまでのセクターに設定してある（Fig.3-1）。1995

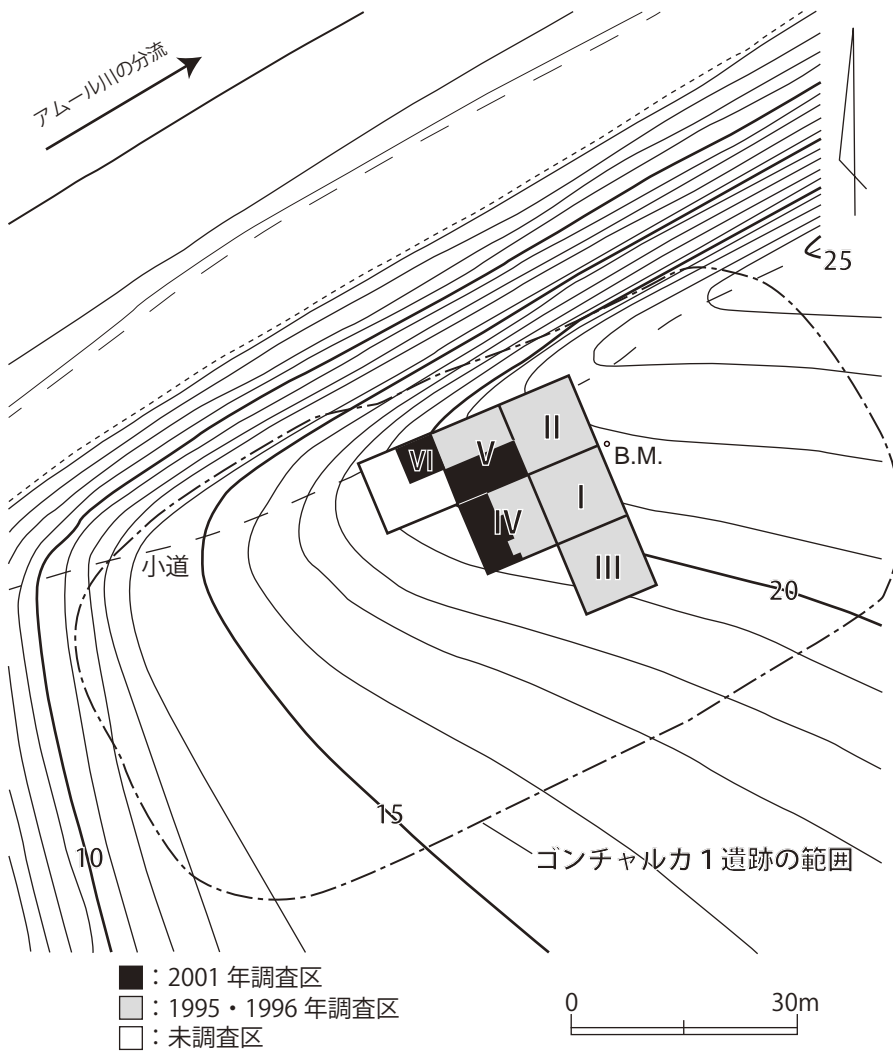


Fig.3-1 ゴンチャルカ1遺跡発掘調査区

Fig.3-1 Excavation grids and surface contour map at the Goncharka 1 site

年以來の既調査ではセクターⅠ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳを中心に約400㎡を完掘し、日本隊の加わった2001年夏の調査では、セクターⅣ, Ⅴ, Ⅵを中心に約120㎡を拡張した（Fig.3-2）。小規模な試掘坑も含め総計531㎡を完掘したにもかかわらず、異物の平面分布の限界をいまだ把握できないほどに分布の平面的広がりが大きく、出土点数も膨大である。調査区の西と北は急峻な崖のため現在以上の拡張は不可能だが、東と南は緩い斜面が広く続き、調査区のさらなる展開が可能である。1セクターを100の小グリッド（1×1m）に分割し、この小グリッド

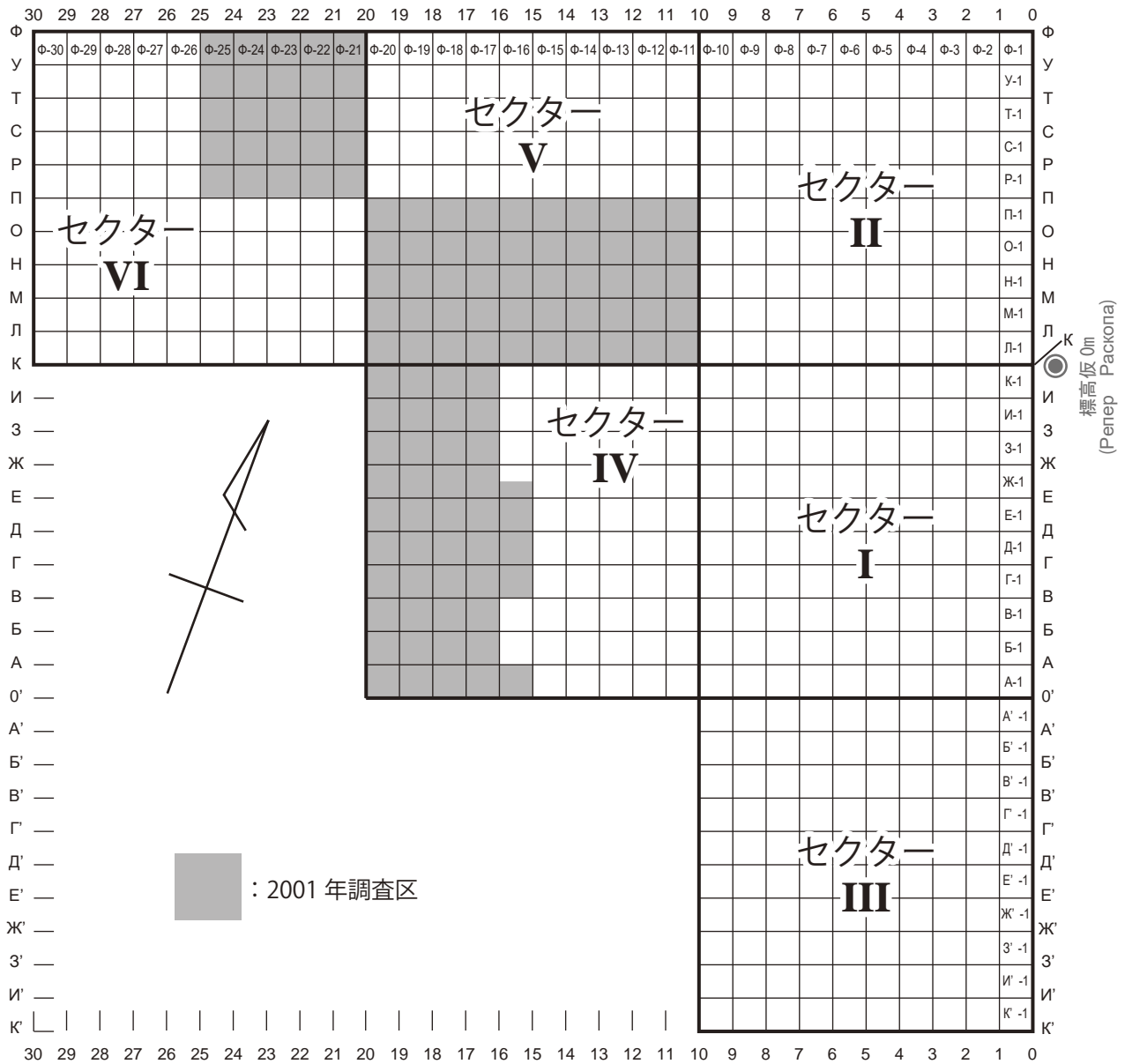


Fig.3-2 発掘調査区のグリッド配置
 Fig.3-2 Arrangement of excavation grids

が遺物取り上げの平面的単位となる。

出土遺物は土器片、炭化物、石器類では二次加工のある製品および石核について3次元座標によってその位置を記録するよう努めた。二次加工のないと判断された剥片類はグリッド一括で回収した。標高については基準となるベンチマーク等を遺跡周辺で確認することができず、また現アムール川の水面を基準とした原点移動も困難であったため、発掘区のK杭付近に仮のベンチマークを定め、この仮ベンチマークを原点=0mとして原点からの比高を算出し、遺物の取り上げを行った。(長沼)

3-3 調査の経緯

ノヴォトロイツコエ10遺跡は、周辺のピチハ遺跡群、オシノヴァヤレーチカ遺跡群、そして本遺跡が所属するノヴォトロイツコエ遺跡群の各遺跡と同様に、ウスリー川とアムール川支流の合流地点にあり、

流水の浸食作用を受けた小谷の岬状突端に立地する。本遺跡周辺では、へハツイル山脈からの扇状地の末端が、アムール川支流の浸食を受けて形成された台地状の地形の崖線に沿って、現アムール川の水面からの比高 15～45m に、60 箇所あまりのオシポフカ文化期の遺跡が確認されている。この内ノヴォトロイツコエ遺跡群では、オシポフカ文化から中世までの遺構・遺物が多数の箇所から得られている。2016 年現在までにオシポフカ文化期遺跡は 70 箇所以上が発見されているが、その内の約 8 割は、本遺跡が所属するへハツイル・ゲオアルヘオロギー地区に存在しており、本遺跡周辺地域は濃密な当該期遺跡の集中を形成している。

2001 年に日露共同で発掘したゴンチャルカ 1 遺跡は、1995 年・1996 年の日本側の参加していない先行調査も含めて既調査範囲の面積が広く、石器資料や土器資料も豊富である。しかし完新世以降に比定できる土器片も出土し、寒冷地性の土壌攪乱の影響も認められるなど、文化編年上の異なる時期に帰属する遺物や炭化物が混在している可能性があることも判明した。そこで別の遺跡を複数発掘して基礎データを得た上で、改めてゴンチャルカ 1 遺跡の出土資料を再考することが望ましいとの判断に至った。発掘調査は N.I. グロヂェコバ名称ハバロフスク地方郷土誌博物館とプロジェクトアムールチーム（代表：加藤博文・山田昌久）の間で協定が結ばれて行われた。

発掘調査は、2001 年 8 月 13 日～8 月 30 日までの期間に、日本側から長沼正樹、松本拓、工藤雄一郎、橋詰潤、五味岳が、ロシア側からは I. シェフコムード、M. ガルシュコフ、S. コスチナほか数十名の調査補助者が参加して行った。引き続き同年 8 月 31 日から 9 月 3 日まで資料調査を行った。その後、資料整理は、2017 年 12 月まで橋詰、内田、長沼が中心になり断続的に実施した。（長沼・橋詰・内田）

3-4 層位、遺構、遺物の出土状況

Fig.3-3-2～3-3-4 に各セクターの壁面及びベルトの層位を示した。基本層位は 1～5 層を確認した。1 層は表土の黒色土で、きわめて薄い。2 層は灰白色でややローム化した砂質粘土層である。調査区全域で安定した堆積をみせ、後期新石器時代、初期鉄器時代の遺物をごく少量包含する。3 層は 2 層と似た砂質粘土層で、2 層よりも風化が進み粘性が強い。オシポフカ文化期の遺物包含層である。過去の調査所見を踏襲し、色調を基準にさらに 3a 層、3b 層に分層した。ともに調査範囲の全面に安定して堆積している。黄色の強い 3a 層は遺物の包含量がやや少なく、赤色の強い 3b 層で出土量が増える。4 層は 5 層との漸移層で、水成堆積の砂が混じって灰白色がかり、粗粒で締まり、粘性ともに弱い。調査区の全体には広がらず、局地的に認められる。この層からも遺物は多く出土するが、4 層下部から 5 層上面で減少する。5 層は基盤で水成堆積の砂礫層である。また 4 層以下には、東西方向に走る氷楔（アイスエッジ）を平面的に確認できる。この氷楔に流入した土からも少量の遺物が出土するが、構造土の形成時期を示すのではなく、埋没過程で遺物が移動したものと判断している。

円礫の集中部を多数検出した（Fig.3-3-1-1～3-3-1-4）。大きく 2 種類に分けられる。1 つめは、人頭大の円礫が間隔を空けて散布し、基盤の砂礫層に確認できる円礫と岩相・大きさが異なる。被熱がある例、平坦面をもつ台石状の例、剥離面をもつ石核や石斧の未製品状の例も一部に含む。人為的な性格が強いと考えている。2 つめは、拳大かそれ以下の小円礫が狭い範囲に密集する。被熱や剥離等は認められず、基盤の砂礫層へ漸移的に連続する部分もある。こちらは自然現象である可能性を含む。しかし 1 つめと 2 つめは、平面・垂直分布とも明確に分け難く、一つの礫集中に両者の性格が見られることもある。総じて個別の評価は困難である。いずれも 3a 層から 4 層までみられ、特定のレベルに集中することはない。

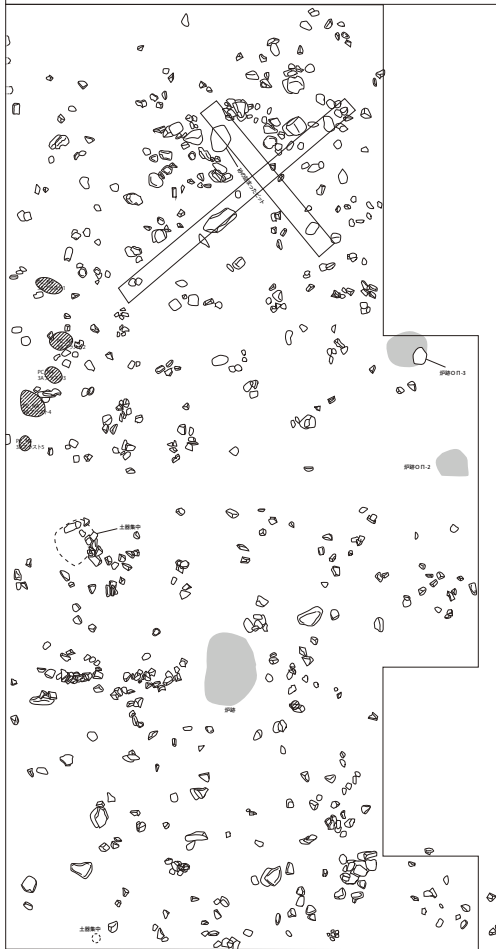
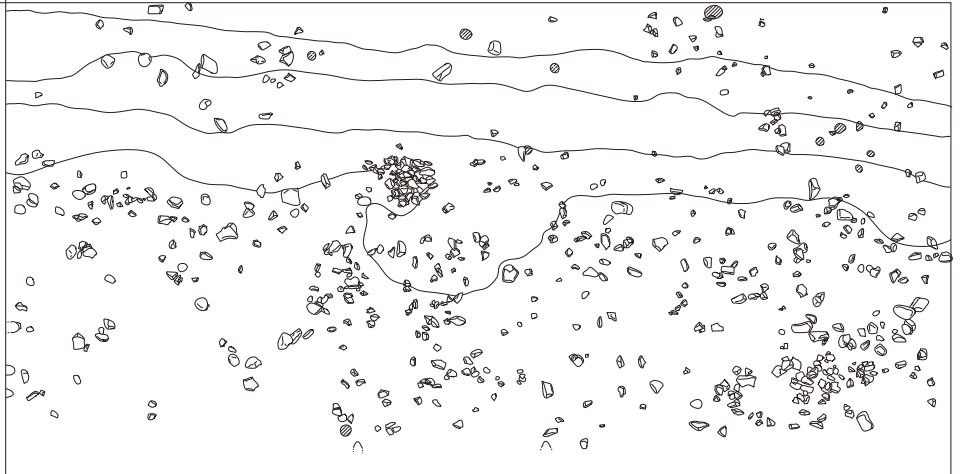
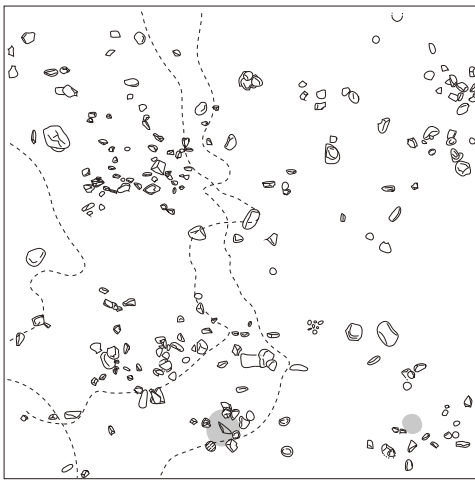


Fig.3-3-1-1 2001年発掘調査区セクターⅣ・Ⅴ・Ⅵ
 Fig.3-3-1-1 Excavation grids of Sector IV, V, VI in 2001

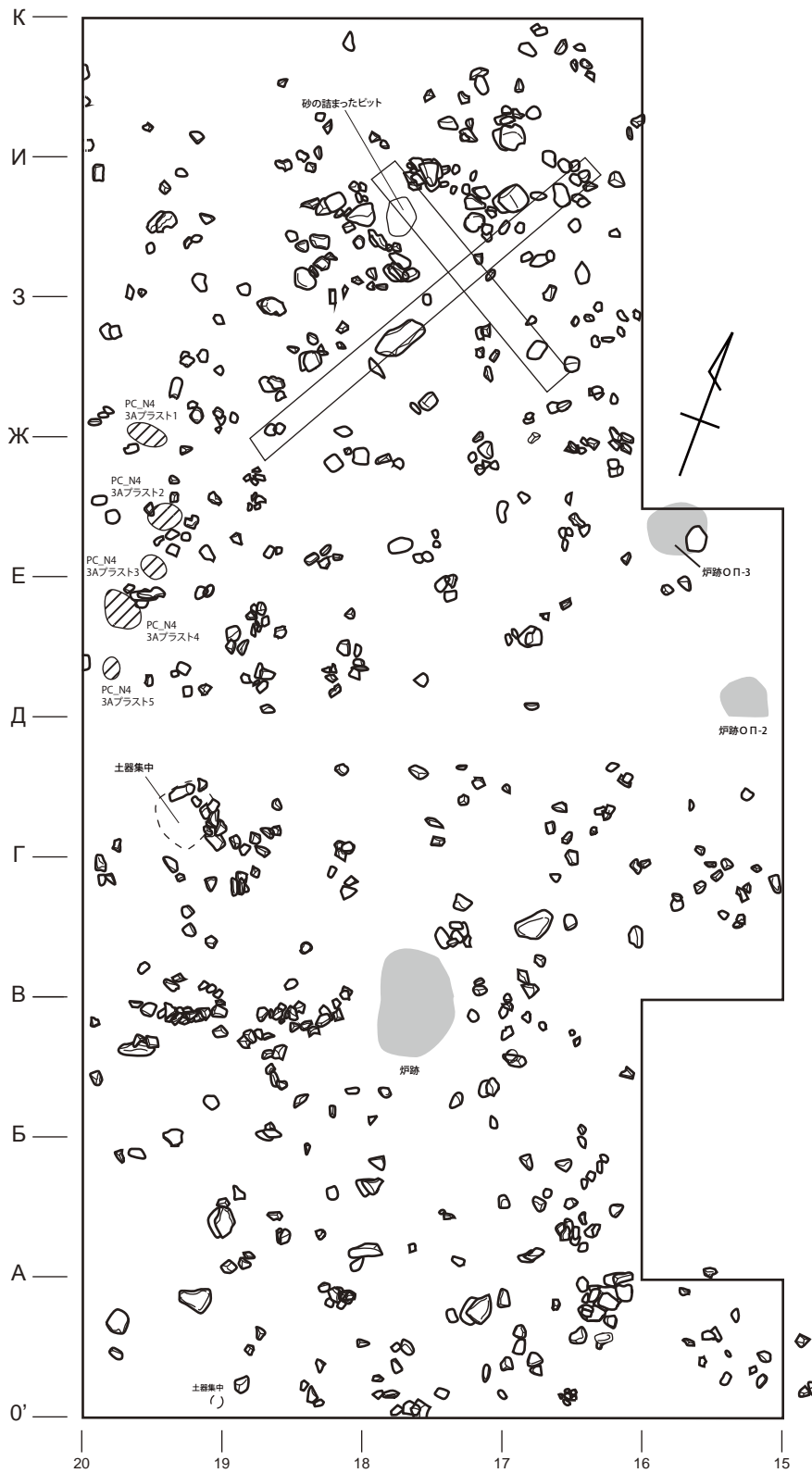


Fig.3-3-1-2 2001 年発掘調査区セクター IV
 Fig.3-3-1-2 Excavation grids of Sector IV in 2001

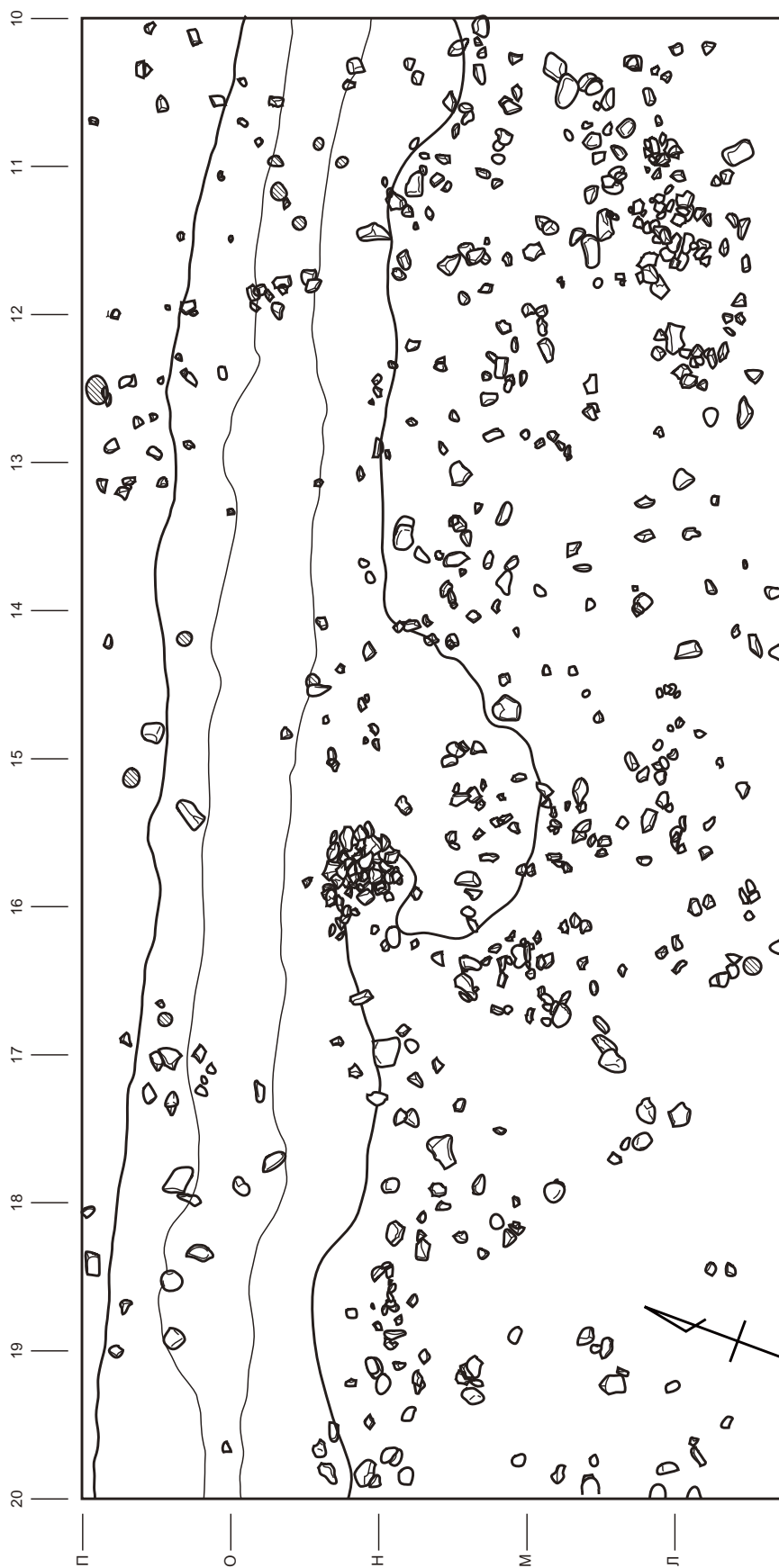


Fig.3-3-1-3 2001 年発掘調査区セクターV

Fig.3-3-1-3 Excavation grids of Sector V in 2001

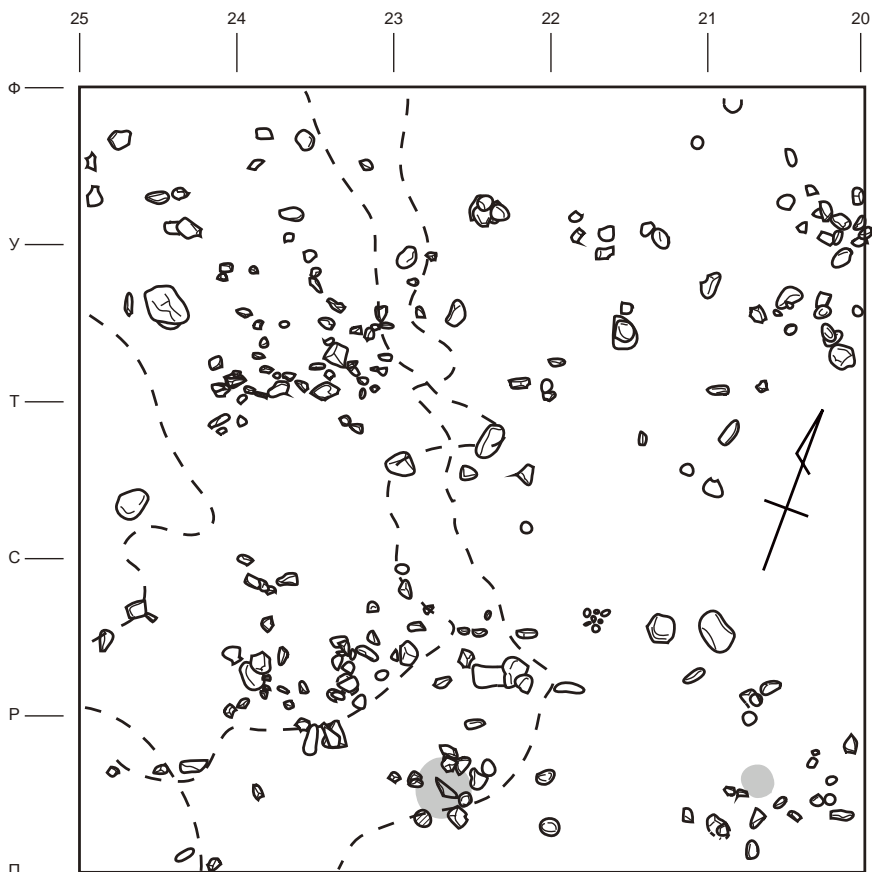


Fig.3-3-1-4 2001 年発掘調査区セクター VI
Fig.3-3-1-4 Excavation grids of Sector VI in 2001

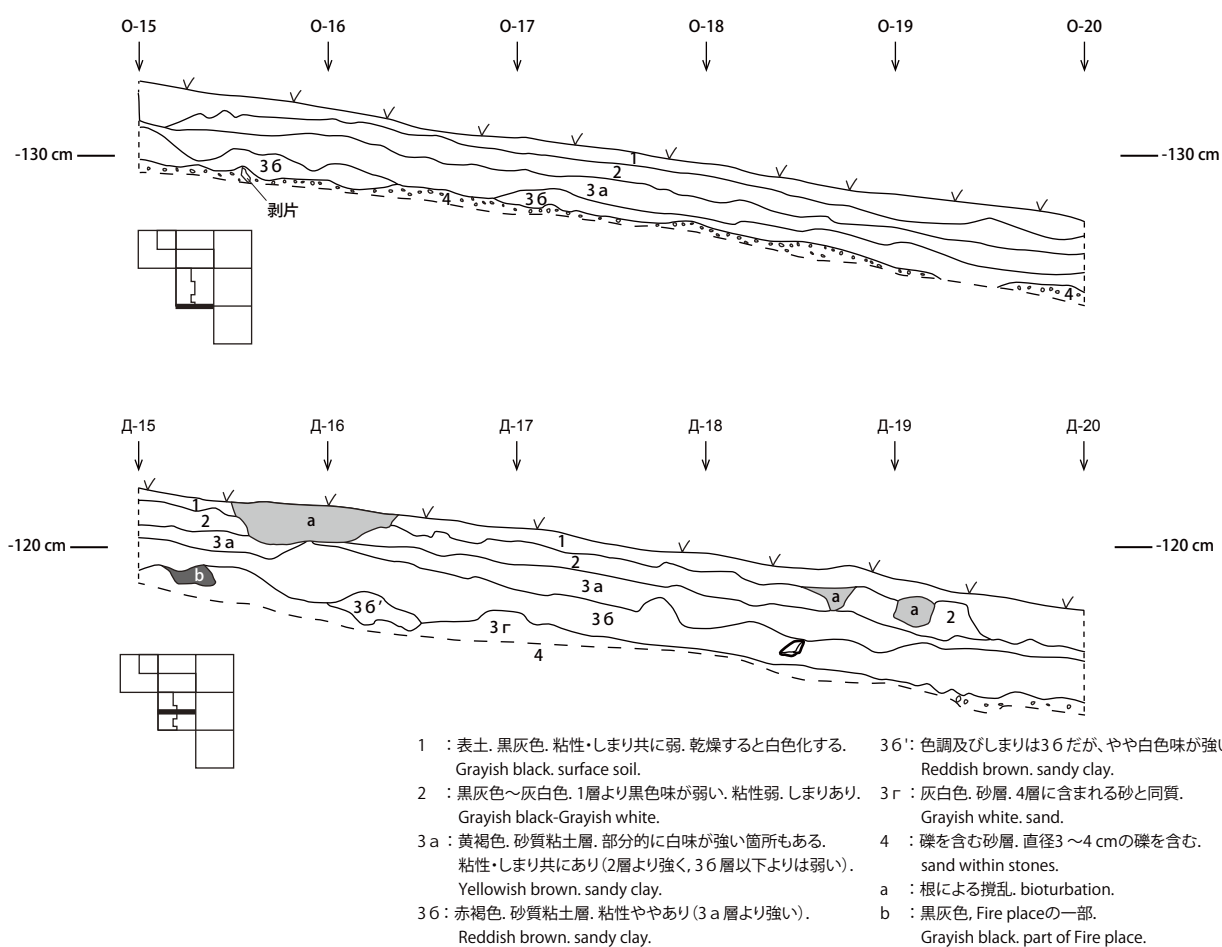


Fig.3-3-2 土層断面 (1)

Fig-3-3-2 Stratigraphic profiles (1)

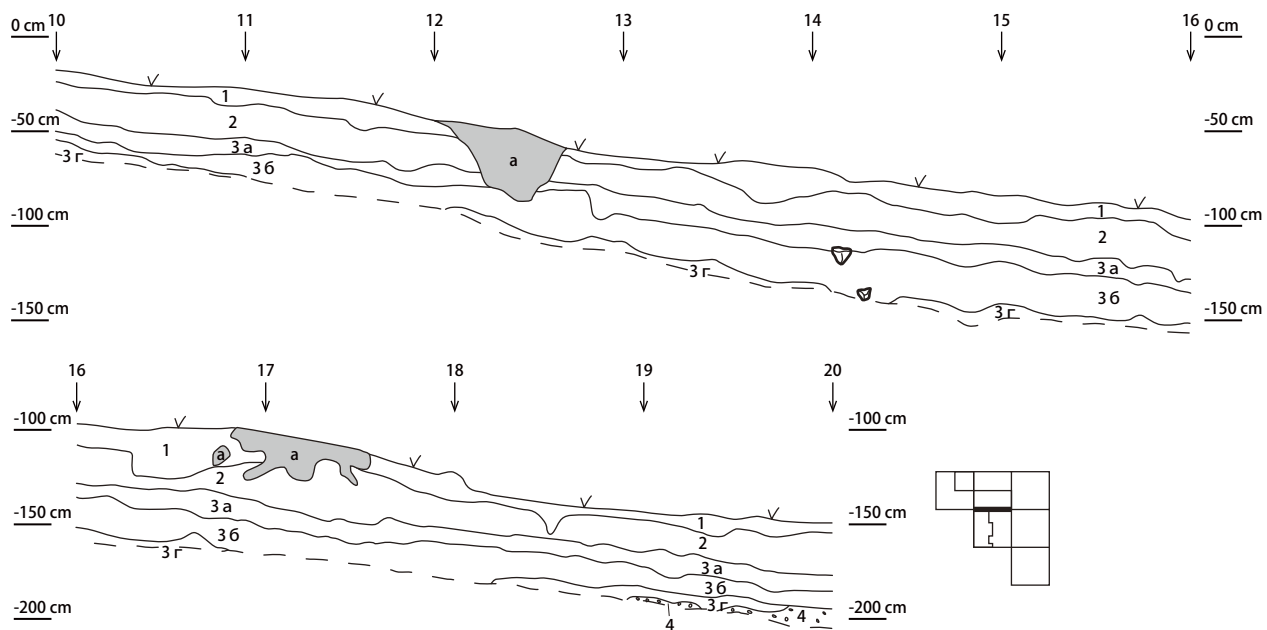
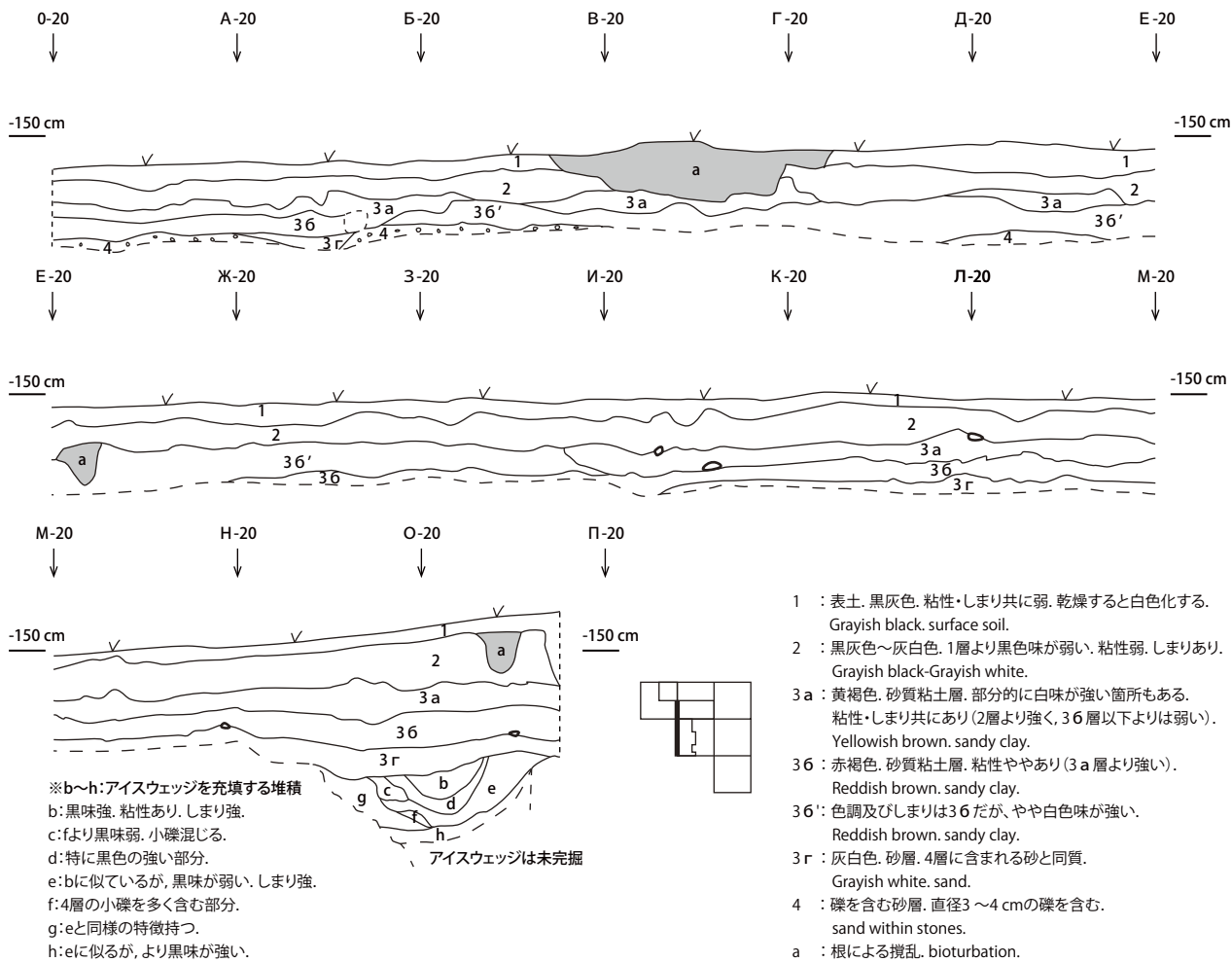


Fig.3-3-3 土層断面 (2)

Fig-3-3-3 Stratigraphic profiles (2)

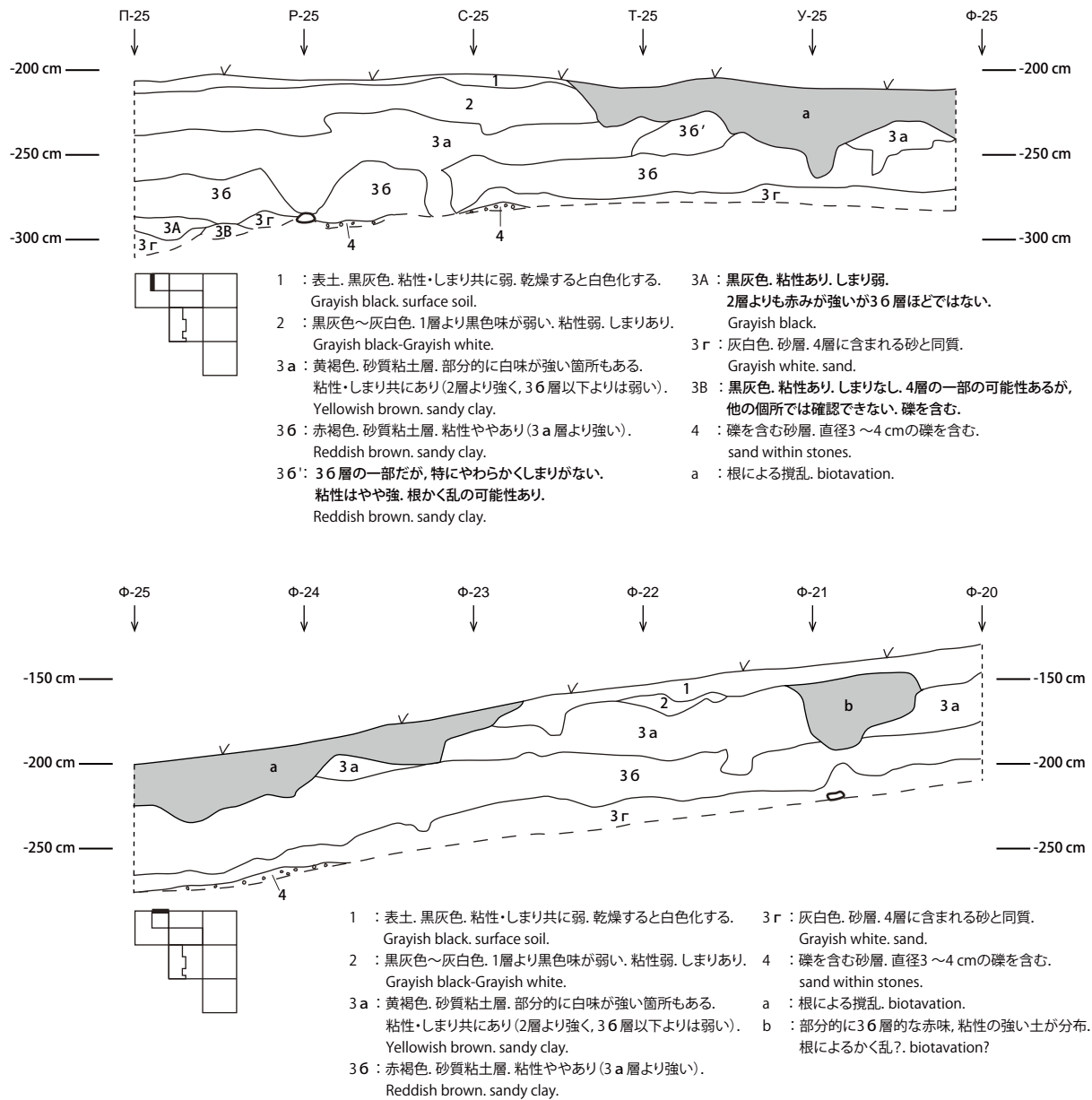
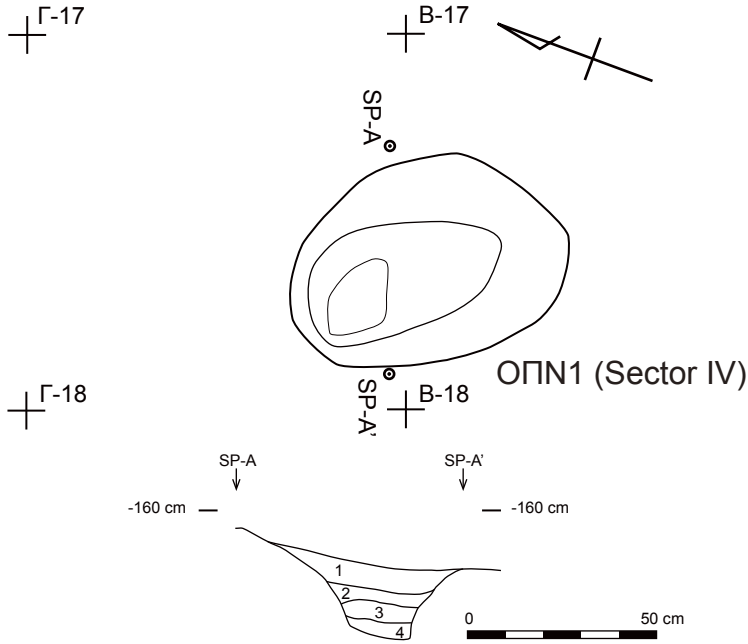


Fig.3-3-4 土層断面 (3)

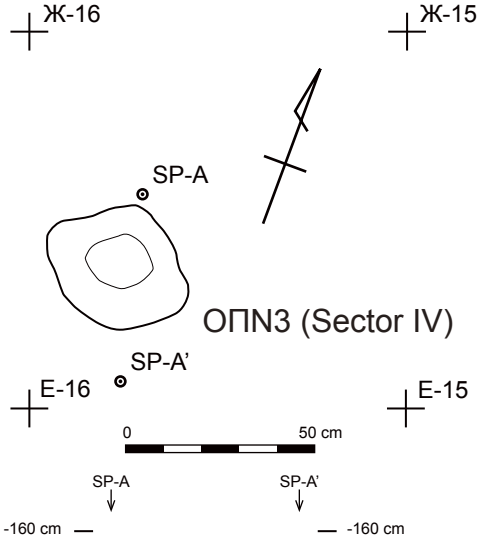
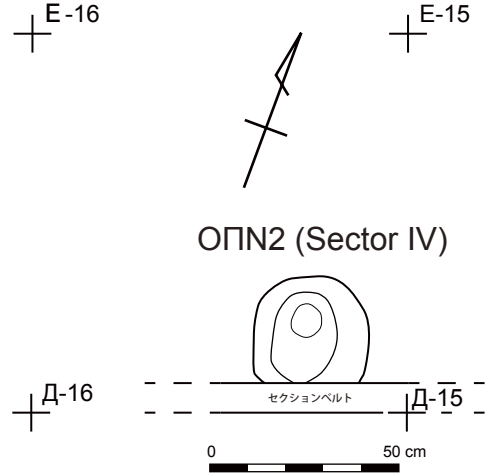
Fig-3-3-4 Stratigraphic profiles (3)

自然礫の集中以外に、炉跡と認識した遺構を7基検出した (Fig.3-3-5)。直径 30-50cm 前後の円形または楕円形を呈する暗色のシミで、プラン確認時には一見すると大形の柱穴のように見えるが、半截すると中央を深さ 10cm 程度の最深部とする、浅い皿状となる。明確な炭化物集中や赤色化した焼土、白色の灰などは肉眼で確認できない。斜面地のためレベリングのデータは類似した値を示さないが、7基ともすべて 3b層中であり、傾斜に沿う場合のおおむね同一の平面から検出された。Fig.3-3-5 のセクター VI のOII N は、径 10cm 程度の円礫が配され、石囲い状を呈していた。これらの暗色の覆土を精査すると、微量の炭化物粒が検出される。OII N を含めた 3 基から 1 点ずつ計 3 点の炭化物試料の採取に成功した。

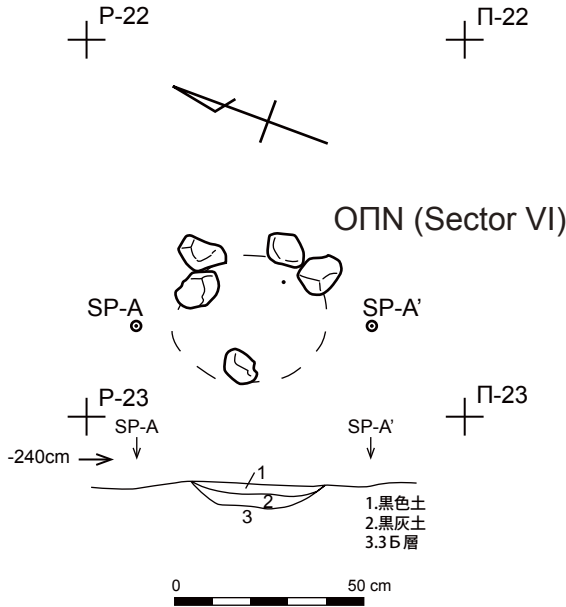
セクター IV のOII N1 は、平面形が隅丸の三角形状となり、断面形は北西側が深くなる台形状となる。検出面からの深さ約 25cm であり、覆土は水平状に堆積する。1層は黄褐色土で、しまりがやや弱く、粘性も弱く、水分が乏しい。直径 1mm 程度の礫を少量含んでいる。2層は灰黄褐色土で、しまりが強く、



- 1層:黄褐色土。しまりやや弱い,粘性弱い,水分乏しい。直径1 mm程度の礫を少量含む。
 - 2層:灰黄褐色土。しまり強い,粘性弱い,水分乏しい。
 - 3層:黒褐色土。しまり非常に強い,粘性弱い,水分乏しい。直径1 cm程度の礫を少量含む。
 - 4層:黒褐色土:しまり非常に強い,粘性弱い,水分乏しい。3層より黒味が弱い。
- ※炭化物はどの層でも確認できない。



- 1層:黒褐色土。しまり非常に弱い,粘性弱い,水分乏しい。直径1 cm程度の礫を少量含む。
 - 2層:灰暗褐色土。しまり弱い,粘性弱い,水分乏しい。
- ※1, 2層どちらにおいても炭化物は確認できない。



- 1.黒色土
- 2.黒灰土
- 3.3層

↑ A-19杭から60 cm

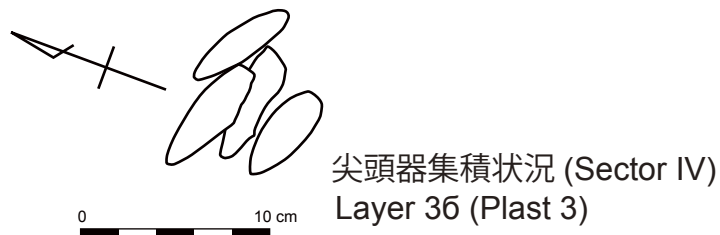


Fig.3-3-5 検出遺構

Fig-3-3-5 Plan of structures

粘性が弱く、水分が乏しい。3層は黒褐色土で、しまりは非常に強く、粘性は弱く、水分乏しい。直径1cm程度の礫を少量含む。4層は黒褐色土で、しまりは非常に強く、粘性が弱く、水分に乏しい。3層よりも黒味が弱い。なお、炭化物はどの層からも確認できない。セクターIVのOII N2は一部をセクションベルトに重複して検出した。平面形が楕円形状となり、検出面からの深さ8cmである。セクターIVのOII N3は、平面形が方形状となり、検出面からの深さ8cmである。1層は黒褐色土で、しまりは非常に弱く、粘性が弱く、水分に乏しい。直径1cm程度の礫を少量含む。2層は灰暗褐色土であり、しまりは弱く、粘性が弱く、水分に乏しい。1, 2層どちらにおいても炭化物は確認できない。また、礫集中や炉址以外には、セクターIVの36層から尖頭器の集積を検出した (Fig.3-3-5)。

なお、ゴンチャルカ1遺跡では、花粉分析から、この地域で各自然層が堆積した期間の古環境を復元している。これに人工遺物(考古学的編年)と¹⁴C年代をあわせて、各層のおよその形成年代が推定されている(Шевкомудほか2001)。ゴンチャルカ1遺跡の1・2層は現在に近い植生で、現代と初期鉄器時代の人工遺物を産出する。3a層は温暖な針広混交林で、後期新石器時代の人工遺物を産出する。36層は針葉樹とシラカバの森林ステップで、9-10ka.の¹⁴C年代(未校正)から新ドリアス期またはプレボレアル期に対比でき、オシポフカ文化の人工遺物を産出する。4層(36層と氷楔の充填土との間)はアレード期に対比できる温暖な植生を示す。4層下部と氷楔の充填土は、寒冷で乾燥したツンドラ-草原ステップを示し、未校正の¹⁴C年代は12kaでオシポフカ文化の遺物を産出する。5層の砂礫層からは花粉が検出されていない。ゴンチャルカ1遺跡の1～3a層と本遺跡の1～3層は肉眼観察による特徴が類似し、基盤の砂礫層(ゴンチャルカ1遺跡の5層と本遺跡の6層)も共通した扇状地の斜面堆積物である。ゴンチャルカ1遺跡の36層と4層を、本遺跡の4層と5層に対比できるが、色調や礫の含有率に微妙な違いもある。Fig.3-3に示したように本遺跡の4～5層は部分的変異に富み、細分される場合や欠落する場合がある。

(長沼・内田)

3-5 出土遺物

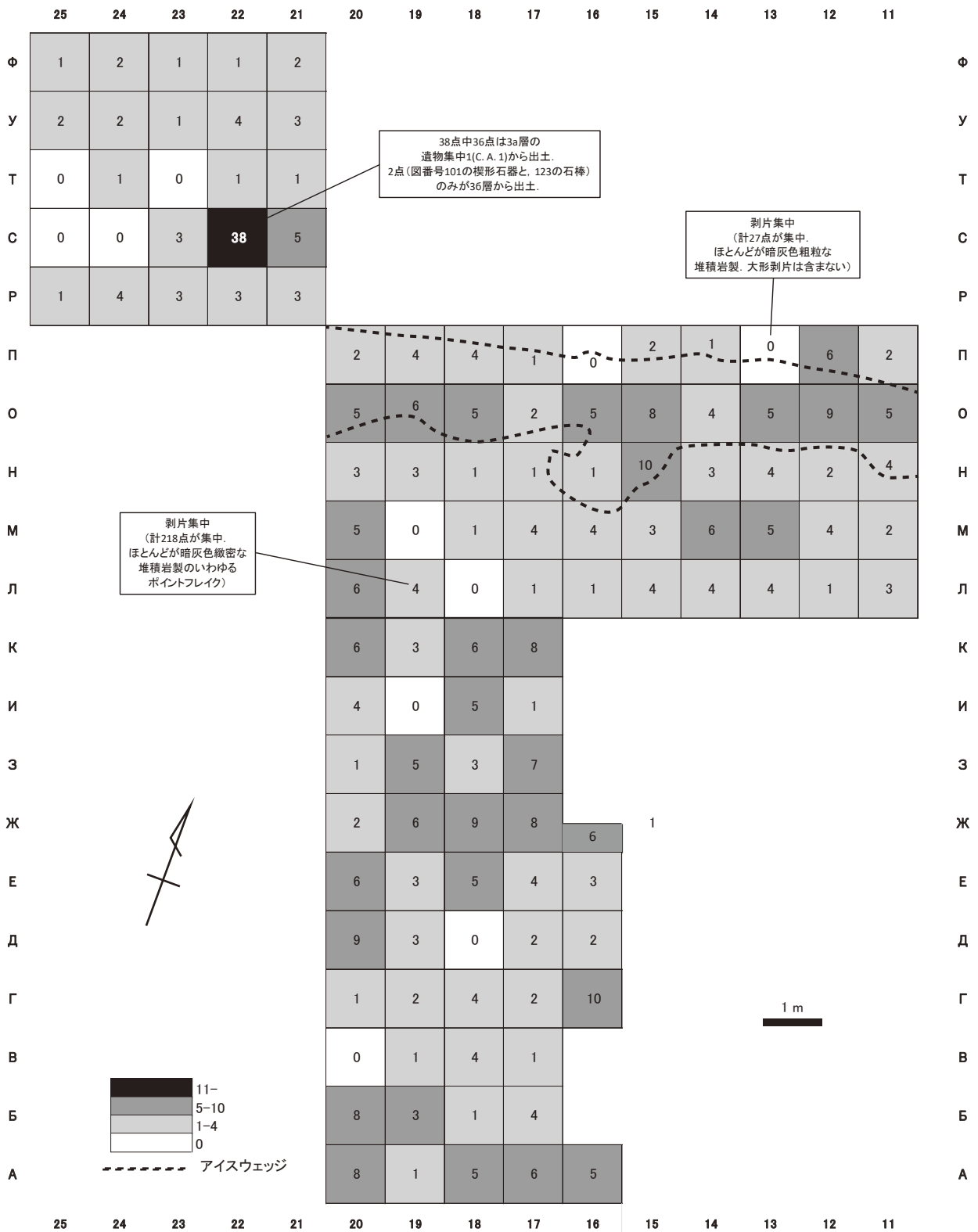
ゴンチャルカ1遺跡の2001年調査では、二次加工が施されているなどといった特徴を有する定形的な石器と、土器片について、平面および垂直方向の出土位置情報の記録をおこなった。その結果、石器437点、土器約400点の3次元出土位置情報を記録した(ただし、集中して出土した土器については、一括して「土器集中」として位置情報を記録し、一点ごとの位置情報は記録していないものがある。また、剥片の集中出土については、上記の437点の中には含めていない)。なお、このほかに多数の剥片、碎片類などが出土しているが、これらについてはグリッド単位で人工層位(Пласт: プラスト)ごと一括して取り上げをおこなっている。一括して取り上げられた剥片などの石器は、台帳が整備されておらず十分な整理ができなかったため、これらに対する分析はおこなっていない。また、礫も多量に出土しているが礫石器として取り上げたもの以外は、平面的な位置情報と出土レベルの情報の記録はしたが、取り上げは行っていない。以下の事実記載では3次元出土位置情報を記録していない遺物については除外して、出土位置情報が記録されている定形的な石器を中心とした437点、土器片約400点を対象として事実記載をおこなう。

まず、出土遺物の組成については、尖頭器、両面加工石器、有茎尖頭器、石鏃、細石刃核、細石刃、削片、局部磨製石斧、打製石斧、磨製石斧、彫器、搔器、削器、楔形石器、二次加工のある剥片、微細剥離痕のある剥片、縦長剥片、石核、有溝砥石、台石?、磨石?、石棒、石錘、擦切りにより作出された石器素材、敲石、礫器、二次加工のある礫、原石などの石器が出土しており (Table 3-1-1)、さらに土器が約

400点出土している(3-5-2参照)。このほかに、グリッド単位で人工層位ごと一括して取り上げをおこなった多数の剥片、碎片、礫などが出土しているが集計は未了である。石器では両面加工の尖頭器や搔器などの出土数が多い。剥片石器には両面加工の石器製作時に生じたと推定できるいわゆるポイントフレイクを素材としたものが含まれており、本遺跡での石器製作は両面加工のものが中心であったと推定できる。細石刃関連遺物では、削片が1点のみの出土であることや、細石刃核の形態から、本遺跡では、両面加工の母型から削片が剥がされて打面が準備される、湧別技法類似の技術によるものはほとんど認められないと判断できる。また、有茎尖頭器が3点、(Fig.3-4-2-6の47, 48, 49)と凹基無茎の石鏃(Fig.3-4-2-1の2)と有茎石鏃が2点(Fig.3-4-2-1の4, Fig.3-4-2-2の15)が出土している。土器片は約400点が出土位置を記録して取り上げられている(ただし、出土位置としては1箇所として記録した中に複数個の土器片が含まれている場合がある)。調査面積が広いこともあるが、橋詰ほか編(2016)で報告したオシノヴァヤレーチカ10遺跡や、橋詰ほか編(2017)で報告したノヴォトロイツコエ10遺跡に比して、土器の出土点数が多く、残存状態も相対的に良好なものを含んでおり、型式学的な検討が可能な文様等の確認できる資料が確認されている(3-5-2を参照)。なお、本遺跡ではオシポフカ文化期のほかに、後期新石器時代と古鉄器時代の遺物も出土している(3-5-1および3-5-2参照)オシポフカ文化期の遺物が中心となっていると推測されるが、ほかの時期の遺物の混入についても注意が必要である。

Table 3-1-2に層位別の石器出土点数を示す。3次元での出土位置情報を記録して取り上げた計437点の石器は、2層から8点(全出土石器437点中に占める割合は1.8%)、3a層から76点(17%)、3b層から281点(64%)、3r層から26点(5.9%)、5a層から15点(3.4%)、КРИОГН(氷楔)から23点(5.3%)が出土している。3b層からの出土が最も多く2/3近くを占め、3a層出土がそれに次いでおり、他の層からの出土は相対的に少ない。出土石器の点数を器種ごとにみても、概ね3b層を中心に出土する傾向は変わらない。こうした出土傾向は土器でも変わらない。ただし、磨製石斧および磨製石斧の未製品、敲石に関しては3a層からの出土が最も多い。さらに石鏃は計3点が出土しているが、2層、3a層、3b層からそれぞれ1点ずつ出土している。

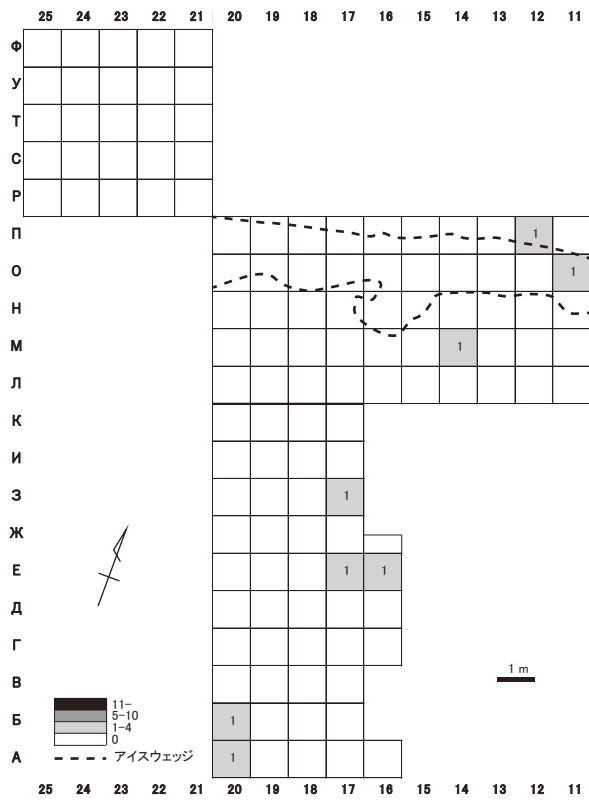
Fig.3-3-6～3-3-8にグリッドごとの石器出土点数をまとめて示す。遺物の分布の傾向を全石器の出土状況を示すFig.3-3-6でみると、C-22グリッド(38点出土)に遺物が最も集中し、アイスウェッジ周辺にも比較的石器の出土が集中する。こうした傾向は土器と同様である(3-5-2参照)。ただし、土器の出土がよりアイスウェッジ周辺に集中しているのに対して、石器はそれ以外のセクターIVにも散漫な集中が点在しており、調査区全体により広く分布していることが分かる。層位ごとに石器の出土状況を確認すると、2層(Fig.3-3-7-①)および3a層(Fig.3-3-7-②)の出土遺物は散漫な分布を示すが、特に3a層出土遺物はC-22グリッドに集中している(34点)。この中には磨製石斧および磨製石斧未成品、さらにこれらの製作に関連していると推定される原石や敲石が多数出土している。これらの石器は形態的な特徴からオシポフカ文化より新しい時期のものと推定される。こうした石器のほかにも、本遺跡では形態的な特徴からオシポフカ文化より新しいと推定される石器が一定量出土している(Fig.3-4-1, Fig.3-4-2, Table 3-1-1-②)。土器の内容からは、本遺跡ではオシポフカ文化期のほかに後期新石器時代と古鉄器時代の石器も存在すると推定される。剥片等については混在の可能性は排除できないが、形態的な特徴からオシポフカ文化より新しいと判断した石器34点を除く403点をオシポフカ文化期の可能性のある石器として以下では取り扱うこととする(Fig.3-4-3～3-4-19, Table 3-1-1-③)。なお、こうしたオシポフカ文化より新しいと推定される遺物はほとんどが2層および3a層から出土しており、3b層以下からの出土は稀である。一方、オシ



※点取り石器全点(表示した数字からは礫, 剥片は除いている)

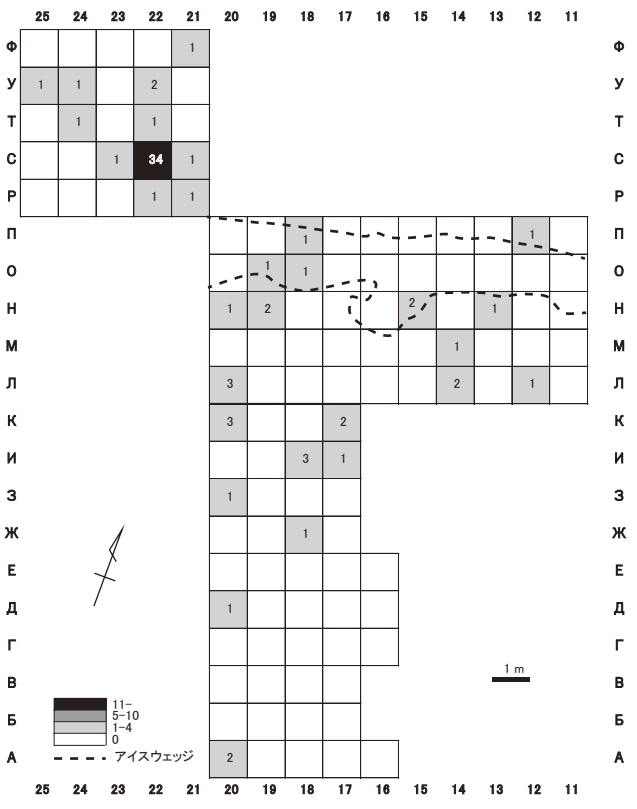
Fig.3-3-6 グリッドごとの石器出土状況 (1)

Fig.3-3-6 Stone tools distribution in each grid (1)



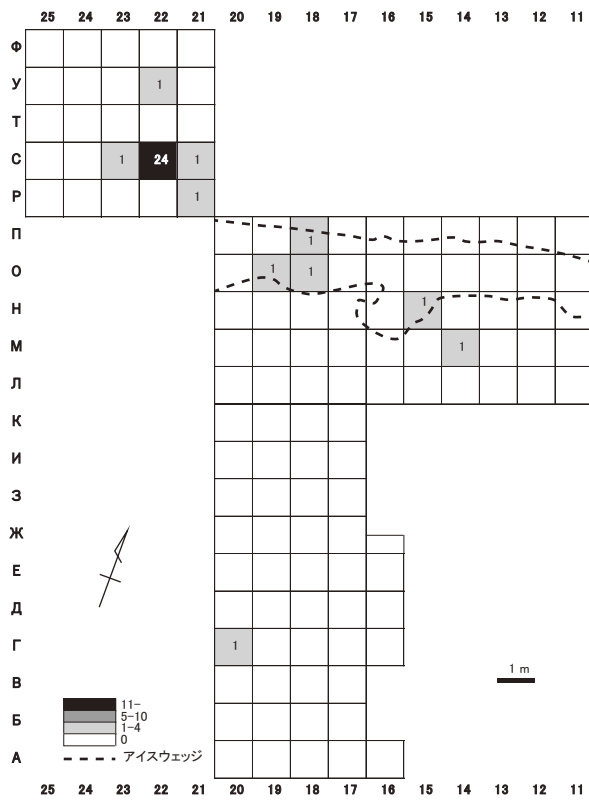
① 2層出土石器の平面分布

Distribution of stone tools excavated from layer 2



② 3 a層出土石器の平面分布

Distribution of stone tools excavated from layer 3 a



③ オシポフカ文化より新しいと推定される石器の平面分布

Distribution of stone tools earlier than Oshipovka culture complex

Fig.3-3-7 グリッドごとの石器出土状況 (2)

Fig.3-3-7 Stone tools distribution in each grid (2)

ポフカ文化期と推定される遺物は2層および3 a層からも出土する。こうしたことから、オシポフカ文化期遺物は全層位を通じて出土する一方、それより新しい時期の遺物は少なく、3 6層以下への混在は比較的少ないと考えることができる。こうした傾向は土器、石器ともに変わらない。また、C-22 グリッドでは3 a層に遺物が集中しており、石器の形態からもオシポフカ文化期より新しいと推定され、オシポフカ文化期遺物とは比較的容易に分離が可能である。3 6層出土石器は調査区全体に分布しているが、土器は比較的アイスウェッジ周辺に分布が集中するのに対し (Fig.3-5-1), 石器は比較的調査区の南がわ (セクター IV) に集中する傾向がある (Fig.3-3-8- ④)。石器と土器の分布傾向にはやや違いが認められる。3 r層出土石器はアイスウェッジ周辺に集中する (Fig.3-3-8- ⑤)。

オシポフカ文化期遺物に関しては、出土層位によって器種組成や形態などに著しい差異は認められない。さらに、石器の摩耗度などについても出土層位ごとの顕著な差は認められなかった。

なお、ここでは主に石器の分布について扱ったが、土器の平面分布等についての詳細な事実記載は3-5-2を参照されたい。

(橋詰)

3-5-1 石器

今回の出土石器の内訳は Table 3-1-1 の通りである。大まかに区分をおこなうと、まずオシポフカ文化より新しいと推定される石器、次に両面加工の石器 (両面加工尖頭器、両面加工石器、細石刃核の一部、石斧、両面加工の搔器など) と、その製作過程で生じた剥片を用いて製作された石器 (周辺加工尖頭器の一部、削器や二次加工のある剥片と微細剥離痕のある剥片の一部など)、そして細石刃関連の石器 (細石刃核、細石刃、削片) を抽出可能である。両面加工の石器やその製作過程で生じた剥片を素材に製作された剥片石器は、暗灰色の堆積岩 (頁岩、泥岩、左記の堆積岩が熱変成したことによって生じたホルンフェルスなど) を中心とした緻密あるいは細粒な石質の石材を主に用いている (Table 3-1-3)。それらの石材に加えて本遺跡では、玉髓や碧玉などの珪質な石材が用いられており、遺跡近傍の河川で中～小形の円～亜円礫が現在でも採集可能である。これらの石材は細石刃や石核に比較的多く用いられている (Table 3-1-3)。さらにそのほかに、主に砂岩を用いた有溝砥石、石棒、石錘や敲石が少量出土している (Table 3-1-3)。

なお、Fig.3-4-1～Fig. 3-4-19の各石器の図には通し番号を付してある。そのため以下では、Fig.3-4-1の1、Fig. 3-4-19の133などといった個別の石器を説明する際には、Fig.3-4-1といった図版番号は省略し、個々の石器実測図に付された通し番号 (1～133) によって説明をおこなう。さらに、以下でおこなう石器実測図の説明の際に用いる実測図と写真の各面の配置法と呼称は田中 (2004) に従う。基本的に左右に3面を配している場合は、左から正面、右側面、裏面を配置している。そのほかに正面の下に下面を、上に上面を配置していたり、実測図ではなく石器の表裏の写真に掲載している場合は、左側に正面、右側に裏面を配置するなど、状況に応じて多様な石器の各面の配置を行っている。また、各石器の属性の詳細は Table 3-3-1～3-3-17に掲載した。

3-5-1-1 オシポフカ文化より新しいと推定される石器

オシポフカ文化より新しいと推定される石器は、形態などから34点を抽出した (Table 3-1-1- ②, Fig.3-4-1, 3-4-2)。ほとんどが3 a層以上の層から出土している。大部分はC-22グリッドの3 a層から出土している。このグリッドからは磨製石斧、磨製石斧未成品、打製石斧これらと同一石材の原石と考えられる礫、敲石

Table.3-1-1 ゴンチャルカ1遺跡出土石器の組成表

Table.3-3-1 Lithic number at rhe the Goncharka 1 site

①全出土石器の器種組成

器種	尖頭器				尖頭器未製品	両面加工石器	有茎尖頭器	石鏃	細石刃核	細石刃	削片	局部磨製石斧	打製石斧	打製石斧未成品	磨製石斧	磨製石斧未製品	彫器	掻器				削器	楔形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	縦長剥片	石核	有溝磁石	台石?	磨石?	石棒	石鏝	接切りにより作出された石器素材	敲石・敲石?	礫器	二次加工のある礫	原石・原石?	軽石・軽石?	総計	
	両面加工尖頭器	周辺加工尖頭器	半両面加工尖頭器	片面加工尖頭器?														周辺加工掻器	半両面加工掻器	片面加工掻器・片面加工掻器?	両面加工掻器																			
計	124	12	6	1	1	5	3	3	9	26	1	4	7	5	10	2	1	6	13	10	5	33	1	24	6	5	59	3	1	1	1	4	1	20	2	8	8	6	437	
	143																	34																						
%	28.4	2.7	1.4	0.2	0.2	1.1	0.7	0.7	2.1	5.9	0.2	0.9	1.6	1.1	2.3	0.5	0.2	1.4	3.0	2.3	1.1	7.6	0.2	5.5	1.4	1.1	13.5	0.7	0.2	0.2	0.2	0.9	0.2	4.6	0.5	1.8	1.8	1.4		
	32.7																	7.8																						

※剥片および礫は除く

※%は437点中に占める割合

②オシポフカ文化より新し可能性の高い石器の組成

器種	尖頭器				尖頭器未製品	両面加工石器	有茎尖頭器	石鏃	細石刃核	細石刃	削片	局部磨製石斧	打製石斧	打製石斧未成品	磨製石斧	磨製石斧未製品	彫器	掻器				削器	楔形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	縦長剥片	石核	有溝磁石	台石?	磨石?	石棒	石鏝	接切りにより作出された石器素材	敲石・敲石?	礫器	二次加工のある礫	原石・原石?	軽石・軽石?	総計
	両面加工尖頭器	周辺加工尖頭器	半両面加工尖頭器	片面加工尖頭器?														周辺加工掻器	半両面加工掻器	片面加工掻器・片面加工掻器?	両面加工掻器																		
計								2				2	3	3	2																								34

※剥片および礫は除く

③全出土石器437点からオシポフカ文化より新しい可能性のある石器を除外した403点の組成

器種	尖頭器				尖頭器未製品	両面加工石器	有茎尖頭器	石鏃	細石刃核	細石刃	削片	局部磨製石斧	打製石斧	打製石斧未成品	磨製石斧	磨製石斧未製品	彫器	掻器				削器	楔形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	縦長剥片	石核	有溝磁石	台石?	磨石?	石棒	石鏝	接切りにより作出された石器素材	敲石・敲石?	礫器	二次加工のある礫	原石・原石?	軽石・軽石?	総計	
	両面加工尖頭器	周辺加工尖頭器	半両面加工尖頭器	片面加工尖頭器?														周辺加工掻器	半両面加工掻器	片面加工掻器・片面加工掻器?	両面加工掻器																			
計	124	12	6	1	1	5	3	1	9	26	1	4	5	2	7	1	6	13	10	5	33	1	24	6	5	59	3	1	1	1	4		8	1	4	4	6	403		
	143																	34																						
%	30.8	3.0	1.5	0.2	0.2	1.2	0.7	0.2	2.2	6.5	0.2	1.0	1.2	0.5	1.7	0.2	1.5	3.2	2.5	1.2	8.2	0.2	6.0	1.5	1.2	14.6	0.7	0.2	0.2	0.2	1.0		2.0	0.2	1.0	1.0	1.5			
	35.5																	8.4																						

※剥片および礫は除く

※%は403点中に占める割合